

資料紹介

吉嗣家資料『日間些事記』

解題

長尾 直茂

一
まずは『日間些事記』（「吉嗣家資料」第2次調査分、整理番号D-255）について説明することから始めたい。

吉嗣拝山による漢文日記。鈔本一冊。半丁十行から成る、青色界線の原稿用紙を用いる。凡て四十八丁。表紙には拝山の自筆で「日間些事記^{戊寅}」とある。戊寅は、明治十一年（清朝の光緒四年、一八七八年）に当たる。記事は、明治十一年二月二日（太陰暦の一月一日）に始まり、同年七月三十一日に終わる。嫡男鼓山による一葉の挿入紙があり、そこには鼓山自身の筆にて「日誌（左手自筆）／拝山三十三歳ノ時（十二年十二月鼓山出生ノ前年）／明治十一年二月 長崎行／四月一日 長崎出帆／支那漫游（蘇州杭州）／六月二十二日 長崎二着ス／八月 太宰府二帰宅」と記す。鼓山は、拝山が四月一日に長崎を出港したと記すが、日記の記事に拠れば、その出港は三月十九日のことである。鼓山の記す、拝山の帰国日である六月二十二日は、日記にある通り正確な日付である。

記事に繁簡はあるが、基本的に当日に面会した人物の名、訪問した名所旧蹟の名称、鑑賞した書画家の名などを備忘録的に記録しており、

日によつては遭遇した事件や見聞した奇事などを長文で記録する場合もある。文章は文言の漢文を基本とするが、草稿であるが故に文章の整わぬ箇所を存し、脱字・衍字、または誤字、あるいは日本語的用法に近い変体漢文と見なさざるを得ない文章も、まま見受けられる。

なお、「吉嗣家資料」のうちには、拝山が清に滞在した期間に筆談に用いた冊子（第1次調査分、整理番号A-255）が含まれており、これら四冊の筆談録は拝山の在清時の動向を知る上での重要な資料である。しかしながら、筆談録には日附や筆記者の記入もなく、断片的な文章やメモ書きのごとき短文が書かれている箇所、または簡略な質問と回答の応酬に終始する箇所などが大半であつて、その内容を読み取ることは甚だ困難があつた。そうした筆談録の難点が、『日間些事記』中の記述との照合を行うことによつて多少なりとも解消され、筆談の行われた日附や筆談者が明らかになるような場合や筆談内容が明確になる場合があることが確認できた。今後、『日間些事記』と筆談録とを精しく対照させることによつて、拝山の中国体験に関する研究はさらに深まることが期待される。

それでは以下、『日間些事記』の記事に拠りつつ明治十一年二月から七月までの、拝山の動向を簡略にまとめておこう。

二月二日～三月十八日、長崎に逗留。

三月十九日午前三時、長崎にて九重丸に乗船し、同日の正午に出港。

二十一日午後、上海に到着し、以降三十一日まで上海に逗留。

四月一日午前十一時、陳子逸^①・池嶋村泉^②と揚州に向けて出発。鎮江を

経て、四日の夕刻に揚州到着。以降二十七日まで揚州に逗留し、二十八日に上海に戻る。

五月十七日午前八時、内海吉堂・寺田掉月⁽³⁾と蘇州へ向けて出発。六界邦、小西門を経て、十九日夕刻に蘇州城閘門外に舟を停泊。二十五日に蘇州を出立して杭州に向かう。二十九日、杭州城外に停泊。以降、三日間ほどで西湖周辺の名所旧蹟を廻る。

六月二日早曉、杭州を出立し、八日に上海へ戻る。

二十日夜、上海を出立し、一路長崎に向かう。同船者は寺田掉月・

鳩居堂安兵衛・小曾根震太郎⁽⁶⁾・王治梅⁽⁷⁾ら。

二十二日夜十時、船は長崎に帰着。以降、『日間些事記』の記事が終わる七月三十一日まで長崎に逗留。

二

以下、『日間些事記』の記事から興味深いものを、書き下し文の形で紹介してみたい。原文は、影印や翻刻に就いて確認して頂きたい。

(一) 広西省、福建省の風俗・民度に関する伝聞

夜に入り、村泉^{そんせん}・品川と相話談する中に、村泉の話に云ふ、「舎弟文太郎 広西行の事に及ぶ。広西の地は邦人未だ至らざる地にして、土人外国人を見れば、則ち小石を擲ち^{なげう}、群聚して声を挙げ、頗る激怒す。往來すること甚だ困難にして、久しく留らずして帰る。嗚呼、不開の地、想ひ見るべし。後に之を憶へば、股栗^{おのの}き髪堅^たつ」と。又た云ふ、「舎弟福州に至りし時、大坂人と同じく往く。福州に至り、坂人疫を受けて死す。海外孤行、四面生客、復た一人の憐むもの無し。此に坂人死して埋葬に至るに困苦し、千苦万心すれども殆ど進退維^これ谷^{きは}まる。時に西洋人有り、逆旅と

門を対し、時々来たりて病を看る。懇切叮嚀^{いづ}、其の情義一に父の子に之けるも、未だ茲^{かく}の如くに至らず。唯だ共に奔走周旋するのみならず、死者の為に許多^{あまた}の資を費す。此の時旅寓疫を忌みて、頻りに日本人の泊宿するを辞すること甚だ刻烈なり。淹留するを得ず、殆ど地として身を措^おくところ無し。此の時西洋人又た其の情を酌察し、誘ひ帰りて同じく寓せしむ。実に尽せりと謂ひつべし。開国と未開国と其の人情の優劣、豈に啻^{ただ}に雲壤の異ならんや。後に我が邦の領事館、此の事を聞き、厚く西人に謝す。政府の意を注ぐこと、亦た深きかな」と。此の事些微と雖も、交道の大緊要なり。故に此に附す。(四月二十一日、26丁オウウ)

右の話は、池嶋文太郎の体験談である。揚州の旅宿での夜話であり、同席者は池嶋(島)村(邨)泉、品川岩三郎の二人である。

文太郎(号は里翠か)は、長崎の人である池嶋村泉の弟で、池嶋兄弟は上海虹口で永昌洋行なる商店を営んでいたようである。村泉・文太郎の二人は清の各地をめぐる書画骨董を買い付けて、それを日本に輸入し販売することを業としていた、いわゆる骨董商であつたらしく、村泉は拝山の揚州行に同道してゐる。

品川岩三郎もまた長崎の人らしく、『日間些事記』二月十三日条に「此の日寓主の品川岩三郎、居を麴屋街に移す」(6丁オ)とあつて、拝山が長崎に滞在中からの知己であつたことが確認できる。この人物もまた骨董商であつたと考えられる。

文太郎の談話では、広西省と福建省福州での体験が語られる。外国人を未だ知らない現地の人々から石を投げられ迫害された恐怖の体験が記され、文太郎の「嗚呼、不開の地、想ひ見るべし。後に之を憶へば、股栗き髪堅つ」との言葉で結ばれている。外国人を減多に見ず、石以

て排斥しようとするような土地にまで古物を買付にゆこうという、日本人の商魂逞しさにも瞠目する挿話であろう。

福建省福州での体験は、大坂の人が現地で客死した折の、西洋人と中国人との対応の相違に関するものである。西洋人は親身に接してくれたが、現地の人は宿泊を拒むほどの冷遇であつたことに憤慨し、「開国と未開国と其の人情の優劣、豈に啻に雲壤の異ならんや」との感慨を口にするが、これは拝山の思いでもあつたであろう。ゆえに拝山は、こうした外国人への友誼は些事ではあるが、交際におけるもつとも大切なことであると筆を結んでいる。十数年前までは声高に攘夷を叫んでいたであろう人達が、かくなる感想を洩らすところに時代の流れが知られて興味深い。

(二) 拝山 窃盗犯を捕らえる

午后、隣壁に一客有り。前夕より楼を同じくし、風儀頗る好く、衣服・携品も、亦た中人以上に類す。時々余の席に來たりて、意文墨に有るが如し。携ふる所の紅茶を齎し寄せ呈し、去り又た暫し有りて來たり、画を作事するを傍觀す。乃ち席間に椅子を挿し、余と対坐す。時に鏘然として声を成すこと有り、始めは音小さく遙かなるが如し。其の声二三次に及び、揮写の際に熟つら聴けば、則ち其の音客の腰下の左側に響く。因りて筆を閣きて首を伸ばし、椅下より窃かに客の腰を窺へば、一囊有り。客の手囊中に入り、暗に入りし所の銀貨を探るなり。是に於いて吾が心愕然たり、驚き起ちて直ちに客の手を握り、大声詈りて曰く、「咄、賊奴、人の眼を掠め貨物を盗み去らんと欲す。其の罪許すべからず、之を殺しても猶ほ餘有り」と。憤然として怒叱するの際、村泉兄

外より來たり、驚き坐に就く。余は只だ賊なりと呼び、賊なりと呼びて、相共に両手を握りて、賊を策すること数回なり。隣壁並びに全家の人々驚き來たりて、事の顛末を聞き、乃ち亦た大いに驚く。吾も亦た大声して品川兄を呼ぶ。周章奔來し搔擾の状を見て、憤然として怒る。乃ち三人相聚り、村兄は賊の髪を攫み、吾と品川の兩人は賊の頭を格撃す。賊声を挙げ叫ぶこと悲し。賊の携へし物に鍵し、旅舎の主人の帰るを待ちて、議して処置を為さんとす。時較過ぎて陳氏帰舎し、主も亦た從ひ至り、叩頭して謝罪す。因て賊の行李を検し、直ちに門外に放逐して、事は即ち息む、亦た是れ一奇なり。蓋し賊の探る所の囊は、乃ち村泉の有する所なり。行旅の賓客深く注意せずんばあるべからざるなり。

(四月二十三日、27丁オ～28丁オ)

これは、揚州の旅舎での体験を記したものの。拝山は、揚州新市街の南、挹江門（鈔関）下の埂（硬）子街にあつた東來客棧なる旅舎に滞在していたが、この宿で盜難未遂事件に遭遇したのである。隣室の、中流以上の身なりのよい男が、拝山の揮毫の様子を見る風を装って、こっそりと池嶋村泉の袋から銀貨を盗もうとしていたところを、拝山が取り押さえたという話である。村泉が盜人の弁髪を掴み、拝山と品川岩三郎の二人でその頭を打ち据える様は、さながら小説の一場面を読むかのように笑いを誘うものであろう。「行旅の賓客深く注意せずんばあるべからざるなり」と教訓めいた言葉で結ぶところも何やら滑稽味がある。

(三) 在清邦人との交流

朝、公館に吳碩翁先生に至る。田香谷の寓に到り、昭代叢書・大

明繹史を見る。午后松本氏（割注…本願寺徒の人）、香谷来たる。香谷談じて云ふ、「前年安田某、柳州に至り一贗本を得、之を陸軍官の鳥尾某に売る。某之を珍とすること金石よりも甚し」と。古玩家の人を眩ますこと恐るべし。大具眼の人に非ずんば、容易に手を下すべからざるなり。（四月二十九日、29丁ウ〜30丁オ）

田香谷、すなわち村田香谷が明治十一年に清に滞在しており、拝山とは揚州においても面晤の機会を得ていたことに關しては、拙著『吉嗣拝山年譜考證』（勉強出版、二〇一五年刊。以下、年譜考證）の明治三十九年条の注（5）に記した通りである。この記事を読むに香谷が同年四月には上海に滞在していたこともわかり、当地で古典籍を手したり、古書画の売買に関する内々の情報に接したりしていたこともわかる。香谷の談話に見える安田某は、おそらく古物商の安田鶯谿⁸ではないかと推測される。安田某もまた池嶋文太郎同様に、遠く広西省にまで買付に向いていることも驚きであるが、大都会上海から遠く離れた広西省柳州の地ですら贗物が横行することにも驚きを禁じ得ない。

なお、「吳碩翁先生」（「翁」は衍字であろう）とある吳碩は、代々続く長崎の唐通事の家系の出身で、当時は上海領事館の書記生を勤めており、『日間些事記』にその名が度々見えている。松本氏は、上海の東本願寺別院で布教活動を行っていた、松本白華のこと。同じく別院に住していた北方心泉とともに、『日間些事記』にその名が見える⁹。心泉からは、以下の記事に見る通り、『拝山奚囊』刊行に関する助言を得たらしい。『拝山奚囊』は、拝山が当地の文人らの骨筆をめぐる詩文を輯めた「骨筆題詠」と、拝山自身が揚州や蘇州・杭州などで詠んだ詩歌を収めた「江南游草」「江南游草後」から成る詩文集である。

十六日晴、終日著述の草稿を録す。晚来本願寺に到り、北方に刊行のことを謀る。帰途に西洋の花圃に到りて去る。（六月十六日、40丁ウ）

「草稿」は『拝山奚囊』の原稿と考えられ、その刊行を心泉に謀ったものと考えられる。この翌日には銭子琴にも刊行のことを依頼している。

十七日晴、汪昌績を訪ひ、又た城内に到り子琴に刊行の事を托す。

又た齊玉溪を訪ひて序を属す。（同十七日、同前）

銭子琴に刊行を托した後に、齊玉溪（名は学裘）を訪ねて序文を依頼したことがわかる。すでに重松敏彦氏の指摘¹⁰がある通り、筆談録（A-3）には「骨筆題詠」と「江南游草」を合冊して『拝山奚囊』として刊行する計画に關しての記載があり、ここには銭子琴に上梓を依頼し、十五六日にはそれが完成するとの文言も見える。この日附はおそらく六月のものと推測されるので、上記の十六日、十七日の記事はすでに本文の版木の製作が完成した前後での、心泉や銭子琴への相談、そして齊玉溪への序文依頼についていうものと考えられる。こうした拝山の依頼が果たされる形で『拝山奚囊』の刊行を見たことは、実際に『拝山奚囊』の序文に齊玉溪が筆を執り、もう一篇の序文は心泉が稿を書き、それを銭子琴が揮毫することに確認できる。また、同書が上海で刊行されたと考えられることも最終丁に「上洋馬馥堂刻印」とあることに明らかであり、またその刊年が明治十一年であったと考えるべきであることも上記から窺い知られる¹¹。

（四） 拝山潤筆料を求められて拒否

午后 吳詮鞠潭を訪ひ、又た王道を訪ふ。王道 日内属する所の書

を出だし、且つ小洋一元潤筆と記す。吾乃ち筆を把り王道に謂ひて云く、「余請ふ所の各家の画牋、一として潤格を投ずる無し。必ず潤を要さば、余も亦た書を要せず」と。去らんと欲せば、王道衣を牽きて我を留む。赧色^{たんしよく}面に溢れ、強ひて書する所の物を贈る。乃ち携へて帰り、又た衛鏤生を訪ふ。此の人潤を貪ること甚だ刻し^{はげ}。(五月九日、31丁ウ)

扨山は、四月二十八日に上海に戻つて来て以来、当地の文人——いわゆる海上派の胡公寿・吳鞠潭(名は詮ではなく詮^{かん})・衛鏤生ら文人達のもとを度々訪ねており、王道のもとへは上記の記事以前には、五月六日と八日に訪問したことが『日間些事記』の記事からわかる。おそらくその両日のいずれかに揮毫の依頼をしたものと考えられる。その依頼の書を受領に行った日のことが、上掲の記事ということになる。

王道が揮毫の謝礼金として一元を要求し、扨山が金銭を要求されるのであれば不要と揮毫の書を受けず、立ち去ろうとしたところ、王道は恥かしげに扨山を引き留め、無理にでも書を受け取るよう差し出した、という挿話である。小洋の銀貨一元の潤筆料は、さして高価とするには当らない額ではあるが、文雅の交わりに金銭の授受があることを、扨山は潔しとしなかったのである。しかしながら、こうした扨山の態度は、当時の上海画壇の風習からすれば、とんだ窮措大の言動と捉えられたことであろう。海上派の文人にとって書画を販売すること——すなわち「鬻画」^{いくが}「売画」^{ばいが}——は、上海という近代的な国際都市に生きるための日常茶飯のことだったのである。

例えば、扨山が海上派文人第一の人と見なして「骨筆図」を依頼した胡公寿について、慶応三年(一八六七)に上海を訪問した岸田吟香は、以下のように記している。

潤筆の多少をとふに、胡公寿は山水大堂幅洋六元、中堂幅五元、聯幅四元、そのほかみな次第なり。(『吳淞日記』¹⁵ 慶応三年一月二日条)

扨山が訪問するより十年ほど前の上海において、すでに名家であった胡公寿については、揮毫の相場がすでに定まっており、その価格は王道が求めた謝金一元の何倍もの値段であったことがわかる。

このように「鬻画」「売画」が海上派の特徴の一つとして挙げられ、これが上海という近代的な経済都市の形成、絵画作品を商品として売買し流通させる市場の形成という文脈上に捉えられるべき特徴であることについて、すでに拙稿において触れたことがあるが、ここではさらに異なる視点からの指摘も加えておきたい。

それは上海における阿片禍の問題である。上海のみならず清朝全土にこの禍が拡がっていたことは今更にいうまでもないことであるが、文人達までもがその愛好者となっていたことは、清末の中国を訪れた日本人の日記や遊記に深刻な事実として書き記されている。これも拙稿で触れたが、扨山が揚州で面晤の機会を得た画僧蓮溪もまた阿片吸引者であった¹⁵。こうした阿片禍に陥った者を苦しめたことが、中毒症による阿片の常用と、その常用を可能にするための恒常的な金銭収入であったことはいうまでもない。海上派の「鬻画」「売画」の背後に、阿片を購入するための資金源としての書画販売があったことは、十分に考えられてよいことである。

上記のような状況にあった上海において、文人どうしの交遊に金銭が介在することを嫌う扨山の言は、海上派の文人を戸惑わせるに十分であったであろうし、また掲引の記事に窺われる衛鏤生のように断固として潤筆料を要求するがとき反応も惹起したものと思われる¹⁶。扨山は、この衛鏤生の応対を「潤を貪ること甚だ刻し」と唾棄すべきも

のごとく書くが、身過ぎ世過ぎのために「鬻画」「売画」を仕事とする者が、正当な謝礼として金銭を要求し、かく「潤を貪る」と書かれたのでは、いささか気の毒な感を抱く。

後年、拝山自身もまた「鬻画」「売画」を仕事とする、いわゆる職業としての「南画家」という身のうえで生計を立てざるを得なくなつた時に、彼の脳裡ではこの海上派の文人達との交遊はどのように想い起こされたのであろうか。

（五）人身売買に関する伝聞

又た一奇事にして言ふに忍びざる事有り。文太郎温州に到る。

山西の人六人歳八九歳、一人の男子之を統^すぶ。其の体尋常ならず。因て其の故を問ふに、一男子答へて曰く、「我が輩六人の女子を買ひ、之を他所に売らんと欲するなり。近年山西大いに饑^うゑ、百物食尽きて、近ごろは藁を食するに至る。已に生路無く、因て人を買ふこと甚だ廉^{やす}し。此の子一人一斤が四十銭なり」と。分量を以て人を買ふこと、古来未だ聞かず。甚しきかな、饑寒の此の極みに至ること。涙の滴々たるを鎮^{おさ}へて之を聞けども、当に泣くを止むること能はざるべし。況んや饑人の身に於いてをや。（六月十日、39丁ウ）

これは、福州から上海に戻つて来た、池嶋文太郎の話である。上海への帰路のことであろうか、浙江省温州で一人の男が六人の女子を売りに来ているのを見かけたという。山西省では飢餓に喘いで子どもを売らざるを得ない状況であったといい、値段は子ども体重一斤（清代では約六〇〇グラム）につき四十銭の計算であったと記す。この話を聞いて、拝山は涙を禁じ得なかった。そして、ましてや子どもを売つ

た飢えた親の身になれば、なおさら泣かずにはいられないであろうと結んでいる。

このように本日記は、拝山という一文人の動向を知り得る重要な資料であるのみならず、明治初期の日本の文人、あるいは知識人の中国体験を知る上での貴重な資料とも位置づけることが可能である。また、拝山の筆談録と照合することによって、清末の中国文人達の生々しい息遣いすら感得できる好個の文献資料となることも、また自ずと首肯されることと思う。

註

（1）陳子逸は、江戸時代に長崎に来舶した画人として知られる陳逸舟の子で、自らも訪日の経験をもつた人。拝山の揚州逗留時に、俱に史可法祠墓に参拝したことが『日間些事記』四月九日の記事からわかる。なお、陳子逸については、鶴田武良「陳逸舟と陳子逸―来舶画人研究四」（『国華』第一〇四号所収、一九八一年刊）に詳しい。

（2）池嶋村泉は、長崎の骨董商。後述二の（一）「広西省、福建省の風俗・民度に関する伝聞」で記した通り、拝山はこの村泉と品川岩三郎という二人の骨董商と同じく、揚州新市街の宿に逗留していた。この客宿で盗難未遂事件に遭遇したことも、後述（二）「拝山窃盗犯を捕らえる」に記した通りである。村泉に関しては、すでに拙稿「揚州における吉岡拝山」（『石川忠久先生星寿記念論文集 菊を採る東籬の下』所収。汲古書院、二〇二一年刊）において触れたことがあるので、参照されたい。

（3）内海吉堂は、越前敦賀出身の画家。『年譜考證』において触れたことがあるので（五八頁）、そちらを参照されたい。なお、この時期に吉堂が上海に滞在していたことは、『日間些事記』四月三十日に拝山寓居を訪ねたり、五月二日に東本願寺別院で拝山と面会していることから窺知される。

（4）寺田掉月は、『日間些事記』冒頭に内海吉堂と並記された人物「越中魚津

- 寺田久米治（1丁ウ）が該当しよう。おそらく骨董商であったものと思われる。上海を拠点にしていたものと考えられ、拝山の上海での行動に随行していたことが筆談録（A15）からわかる。例えば、画僧竹禅のもとを訪ねた折にも掉月は同行しており、拝山から「姓寺田、名久米治。我邦屈指之商家也」（62丁オ）と紹介され、竹禅に水墨で観音像を描いて欲しいと依頼をしている（同ウ）。
- （5）鳩居堂安兵衛は筆墨商であったといい、拝山訪清時期の上海の文人達と交流を行い、東本願寺別院にもたびたび出入りしていた人物であること、川邊雄大『東本願寺中国布教の研究』（研文出版、二〇一三年刊）に報告がある。
- （6）名は震太郎とあるが、晨太郎の誤記ではないかと思われる。とするならば、長崎の書家・篆刻家小曾根乾堂の嫡男、星海のこと。
- （7）王治梅については、『年譜考證』を参照されたい（五七頁）。
- （8）安田鶯谿については、拙稿「揚州における吉嗣拝山」第三章の注（29）を参照されたい。
- （9）松本白華や北方心泉の上海での活動については、先に引用した川邊雄大『東本願寺中国布教の研究』に詳しい。
- （10）重松敏彦「太宰府の絵師吉嗣拝山の清国渡航について」（『太宰府市公文書館紀要—年報太宰府学』第10号所収。二〇一六年刊）に指摘がある。なお、同氏の論考では、『拝山奚囊』の草稿についても詳述される。
- （11）『年譜考證』では、刊本『拝山奚囊』を明治二十年以降の刊行と見なす旨を記したが（五二頁）、これは誤りであり、正しくは後修本（馮鏡如・王治本の詩篇を補刻した版）の刷られた年が明治二十年以降と考えるべきである。上記のごとく明治二十年以降刊と考えた論拠は、「骨筆題詠」収録の王治本詩が光緒丁亥（明治二十年）の作であったことに存するが、この王治本詩を欠く版があり（前注掲引の重松氏論考にも指摘がある）、併せて本稿で確認した『日間些事記』や筆談録の記載を勘案した時、王治本の詩は明治二十年以降の補刻と考えざるを得ない。因みに明治二十年に王治本が太宰府の拝山のもとを訪ねたことは、すでに指摘したところである（『年譜考證』、八二頁）。以上を要するに、『拝山奚囊』の初刷りは明治十一年に上海で刊行を見たと推定する。ただし、光緒四年（明治十一年）夏五月（太陽暦の六月）の年紀を有する王治梅による、長崎への船上詠を録するので、拝山が帰国してから「骨筆題詠」のパートは刷り上

がり、「江南游草」と合本されたということになるか。また、『年譜考證』では「馮鏡如と同じ船で帰国」（五〇頁）と記したが、これも『日間些事記』の事に拠って、誤りであることが判明した。

- （12）この王道の揮毫に係る書は、吉嗣家所蔵の卷子本『骨筆題詠』（現在は太宰府市文化ふれあい館に寄託）に掲載されたものが、これに該当しよう。「日本拝山先生多藝者也」と始まる文章で、『年譜考證』明治十一年条の五九頁、太宰府市教育委員会編『吉嗣家資料【書画編】』（太宰府市教育委員会、二〇一三年刊）の二一三頁に影印が載る。また、この文章は『拝山奚囊』の跋文としても収録される。

- （13）山口豊編「岸田吟香『吳淞日記』影印と翻刻」（武蔵野書院、二〇一〇年刊）に拠り、適宜に句読点を補った（三〇八頁）。

- （14）拙稿「明治時代の或る文人にとつての中国—明治十一年、吉嗣拝山の清国渡航をめぐる—」（二〇〇二年初出。後に『年譜考證』第二部第一章として収録）第一章（2）「上海における海上派文人との交流」を参照されたい。

- （15）清を訪れた日本人の日記・遊記に見える阿片禍への記事や蓮溪が阿片中毒に陥っていたことについては、拙稿「揚州における吉嗣拝山」第二章「蓮溪真然との面晤」において触れたことがあるので、参照されたい。

- （16）筆談録（A15）に衛鏄生との筆談と考えられる箇所（76丁オウ）がある。拝山が潤筆料無しで書を依頼することに、衛鏄生は明確に「売文売字」で生計を立てているので、それには従えないと断っている。以下、節略して掲げる。

（衛鏄生）弟以売文売字為生。

（拝山）日内所願、固不納潤。弟畢生之珍宝。…（中略）…

（拝山）文墨中之事、損風氣、故不納潤也。固忝先生筆墨、且其人之高極也。若不許、弟則空去耳。

（衛鏄生）既如此説、弟固不能從命耳。

（ながお・なおしげ 上智大学文学部教授）

翻 刻

【凡例】

- 一、本稿には、吉嗣家資料所収『日間些事記』を翻刻して掲載した。
- 一、字体は原則として常用漢字を用い、常用漢字にない場合は正字を用いた。ただし必要に応じて旧字体・異体字をそのまま表記している箇所もある。
- 一、本文には適宜、句点「。」、読点「、」、並列点「・」を加えた。また台詞・引用に該当する箇所には、「」を付けた。校訂註、およびその他の傍注は（ ）を用いた。
- 一、翻刻文中の「／」は改行を示す。割書は「へ」内に示した。左右の表記は向って右側の文字を先に、左側を後にして、間に「／」を入れた。
- 一、判読が困難な文字は□で示した。抹消された文字は当該文字の左に抹消符「ㄣ」を付し、塗抹等で判読が困難な場合は■で示した。
- 一、表紙その他、本文以外に記されている文字は、「」内に表記した。
- 一、丁数は（○丁○）という形で、本文の末尾に付した。「オ」は表、「ウ」は裏を示す。
- 一、訂正・挿入の文字は、出来るだけ底本に近い位置に記載した。
- 一、翻刻の作成は、太宰府市公文書館会計年度任用職員大塚俊司・兒玉良平・重松敏彦・武石智恵・安恒千里（五十音順）が行った。翻刻にあたって上智大学文学部教授長尾直茂氏の監修を得た。
- 一、注釈については、人名及び難解な語句等を中心に、日付の区切り等ごとに付すことを基本とした。作成にあたっては、長尾直茂氏（上智大学）、楊易佳氏（浙江大学古籍研究所博士課程生、同大学田溯義樹氏の紹介による）に教示を得たが、さわめて限られた時間であったことから、その成果を十分に生かすことができなかったことをお詫びしたい。注釈に関する文責は重松にある。

〔表紙〕「日間些事記 戊寅」

（頭書）「密／鈕釦／綿被胎」（一丁才）
スヤキ ボタン ヤクノワタ

越中魚津 寺田久米治⁽¹⁾

内海鹿之号⁽²⁾
マメ

吉堂

越前敦賀晴明町（一丁ウ）

（一）寺田久米次 寺田掉月のこと。解題参照。（二）内海鹿之^(マメ) 内海鹿六。一八四九～一九二五。越前敦賀の人。画家。名は復。幼名は鹿六。字は休卿。号は吉堂とあり、別号に兼段楊柳室主人がある。今回の拝山の清国渡航では、ともに杭州を旅している。『拝山奚囊』（二八七八年）所収「江南游草」の竹禅画拝山肖像を縮臨している。なお解題参照。

始二月二日陰曆正月元日

。二日、快晴、至暮雨。

七時起。至乙咩豊水、与池田雪⁽³⁾江会、相共／至本紺屋町八幡屋。誘引浩潮老人。／時胡蝶忽自窓際来、翻々戯干瓶中／梅花。坐客一斉喚奇々、各賦一首、書于片紙。去途過八百宗、直謁諏訪神社。／繞公園訪劉氏芝香、談話数刻。下□／塔到千秋亭、喫午餐。帰路遊荒木／氏之花園、薄暮帰寓、（二丁才）

（一）二日 この日記は、明治十一年二月二日、旧曆の正月元日から書き始められているが、拝山は清国渡航を控えて、すでに長崎に滞在している。（二）乙咩豊水 拝山の清国渡航前後の長崎滞在時に頻繁に登場する。二月五日に乙咩老人、八日、九日、十日、十一日、十二日、十八日、二十日、二十一日、二十五日、二十七日、二十八日、三月一日、二日（清遊の事を談ず）、三月三日条頭書、三日（航海の期を談ず）、四日（航海延期の事を談ず）、六日、七日、九日、十日、十三日、十四日、十七日（乙咩妻）、十八日、十九日、六月二十七日、七月五日、二十二日にみえる。（三）池田雪江 二月四日にもみえる。（四）浩潮 宮小路浩潮（みやこうじこうちよう）。一八二六～一

九〇四。名は康文。浩潮はその号。十二歳で太宰府の六度寺に入り、実乗坊仙賀と名乗った。拜山は十三歳の折に六度寺に傭われて寺務に従事したが、

その傍らその仙賀より書を学んだとされる。維新後は、天満宮の社職に転じ、宮小路浩潮と称した。書を以て世に知られ、ことに楷書に優れた。二月四日、

五日、九日、十一日、十五日、二十日、二十四日、二十六日、三月五日、七日、八日、七月十日、十六日、十七日、十九日、二十一日、二十四日、二十七日、

二十九日、三十一日にもみえる。(5)八百宗 伊藤八百叟(いとうやおそう)。一八三五―一九一七。号を玉椿軒八百叟という。木下逸雲の門下。家業は長崎奉行御用の八百屋で、八百屋惣右衛門と称した。蟹図は彼の最も得意とするところで、大いにもてはやされた。本史料にしばしば登場する「八百宗」は、この伊藤八百叟のことだろう。二月九日、十一日(「八百宗の宅」もみえる)、十四日、十八日、十九日、二十一日、二十四日、二十六日、三月六日、九日、十一日、十二日、十三日、十五日、十六日、十八日、六月三十日、七月十日、二十二日(八百叟)、二十三日、二十四日、二十五日条にみえる。また玉椿軒の称で二月十五日、六月二十五日、七月八日、十八日条にみえる。

(6) 劉氏芝香 劉芝香(りゅうしこう)。芝香は字。肥前長崎の人。長崎の地役人唐通事の家系の一つ彭城(さかさ)家の人。麻臉子と号して書をよくした。彭城、芝香などの称で、二月二十一日、二十三日、二十四日、二十六日、三月一日、五日、六日、九日、十一日、十六日、六月二十三日、二十六日、七月二日、七日、九日、十六日、十七日、二十日、二十一日、二十五日、二十六日にみえる。(7) 荒木氏 ここにしかみえない。

。三日、雨、旧節分。

八時。黒川(警察/官吏) 桜井信一・三原忠家(県/吏) / (南豊/之人) 来。終日不出。

(1) 黒川 警察官吏とある。二月十五日には平戸の人、長崎県警部官員とみえる。二月十九日、二十二日、二十五日、三月七日、七月九日、十一日、

十三日、十四日、十六日、二十日、二十一日、二十二日、二十三日にもみえる。

(2) 桜井信一 ここにしかみえない。(3) 三原忠家 ここにしかみえない。県吏、南豊の人とある。

。四日、晴。

六時。画事。画事。々後赴于田中氏之招。此/日同氏令息誕生之賀筵也。宮小路・池田雪江/後至。入夜酒酣、老妓来。名千代鶴、音調/頗麗朗、酒興為之増一層。十一時帰家。

(1) 田中氏 二月二十一日にもみえる。拜山はこの日、田中の令息誕生の祝宴に招かれたといい、後には宮小路浩潮、池田雪江も参加している。

(2) 千代鶴 老妓。拜山は「音調、頗る麗朗」と評している。なお、三月十四日には「東浜町の千代鶴宅に至る」とみえ、その自宅は東浜町にあった。

。五日、半陰。

画事至午天。午后訪池原、不遇。過宮小路歸。(2丁ウ) / 薄暮乙咩老人来、入夜県官宇佐美来。十一/時就寝。

(1) 池原 池原枳園(いけはらきえん)。肥前長崎の人。本姓は劉氏。名は謙。字は受益。廷安と称し、別に故時堂、鑑橋外史などと号す。医を業とし、書画及び詩を善くした。僧鉄翁に南画を学ぶ。弟の池原日南とともに劉家の二哲と称される。二月十六日条にもみえる。(2) 宇佐美 ここにしかみえない。県官とある。

。六日、陰雪。

六時。訪成瀬石痴、十字就寝。

(1) 成瀬石痴 なるせせきち。一八三八―一八九五。本姓は横瀬。長崎奉行組下遠見見番成瀬広助を継ぐ。鉄翁に南画を学び、また小曾根乾堂ともに篆刻で世に知られたという。シーボルトの「鳴滝塾」を描いたこと(長崎大

。六日、陰雪。

六時。訪成瀬石痴、十字就寝。

(1) 成瀬石痴 なるせせきち。一八三八―一八九五。本姓は横瀬。長崎奉行組下遠見見番成瀬広助を継ぐ。鉄翁に南画を学び、また小曾根乾堂ともに篆刻で世に知られたという。シーボルトの「鳴滝塾」を描いたこと(長崎大

。六日、陰雪。

六時。訪成瀬石痴、十字就寝。

(1) 成瀬石痴 なるせせきち。一八三八―一八九五。本姓は横瀬。長崎奉行組下遠見見番成瀬広助を継ぐ。鉄翁に南画を学び、また小曾根乾堂ともに篆刻で世に知られたという。シーボルトの「鳴滝塾」を描いたこと(長崎大

。六日、陰雪。

六時。訪成瀬石痴、十字就寝。

(1) 成瀬石痴 なるせせきち。一八三八―一八九五。本姓は横瀬。長崎奉行組下遠見見番成瀬広助を継ぐ。鉄翁に南画を学び、また小曾根乾堂ともに篆刻で世に知られたという。シーボルトの「鳴滝塾」を描いたこと(長崎大

。六日、陰雪。

六時。訪成瀬石痴、十字就寝。

(1) 成瀬石痴 なるせせきち。一八三八―一八九五。本姓は横瀬。長崎奉行組下遠見見番成瀬広助を継ぐ。鉄翁に南画を学び、また小曾根乾堂ともに篆刻で世に知られたという。シーボルトの「鳴滝塾」を描いたこと(長崎大

学図書館蔵「鳴滝塾舎之図」でも知られる。

七日、晴。

八時起。光林寺貝嶋来、促画。午後清人何培／光来、共訪柳橋、對話鬪詩。至晚帰。入夜丸／十之弟并高木来。十二時就枕。高子齋清国／之美酒一壺、言云、「酒以紹興為最、又別添龍眼／肉・榛実・檻欖五六顆、風味頗佳」。此日大城谷信（3丁才）／来。

（1）何培光 かばいこう。清・広東の人。長崎市の福済寺境内に培光撰・書の重修福済寺碑がある。七月七日にもみえる。（2）柳橋 この日、拜山は何培光を伴って柳橋を訪ね、「對話鬪詩」したといい、二月九日には柳橋と「頗る絵理の妙奥を討論」したともある。また二月二十四日もみえる。（3）丸十之弟 六月二十七日、七月一日にもみえる。また丸十は五月一日にみえる。（4）高木 拜山の長崎滞在時にしばしばみえる。二月九日、十七日、十九日、二十一日、二十二日、二十五日、二十八日、三月二日、五日、八日、十五日、十八日、十九日、六月二十三日、二十四日、七月十日、十九日、二十二日、二十九日にもみえる。（5）龍眼肉 りょうがんにく。龍眼は、むくろじ科に属する常緑喬木。その果実を龍眼肉という。（6）榛実 榛は、はしばみのこと。その実は味が栗に似るといふ。（7）檻欖 かんらん。橄欖か。喬木の名。その実は榧に似ており、食用となる。（8）大城谷 大城谷桂樵（おおぎたにけいしょう）。一八二四―一八八二。太宰府の絵師。禅僧古溪に師事して詩・画を学び、幕末、五卿の太宰府滞在中には、その命を承けて盛んに制作にうちこんだという。二月九日にもみえる。

。八日、晴。

七時起。画事、午後訪成瀬石痴、縦談篆／隸諸体、上自晋漢唐宋、下至明清、諸／家歴々明辨、其代其人、審各所以自異。／石痴平生刀筆之妙、刻苦之精、可以概見／矣。且其為人開濶不羈、能与人交無少倦色、／音声痛快、興到意適、

則終日至忘餐／食。宜哉、其風致迸出於鑿痕也。席間直／把力、為余刻拜山二字。且談且刻、咄嗟現出（3丁ウ）／自然之氣韻。噫非平生有素、焉能如是耶。／入夜歸途訪乙豐水。時有誹歌客三四名／先至、蓋當開卷之夜也。畢而呼杯引興。／就中曾路里新左エ門、太田南畝之奇談、紛／紛衝口而出。其解頤、胡待（二正也）
匡生之記詩哉。十二／時就枕。

（1）縦談 しょうだん。思うままに話すこと。（2）迸出 ほうしゅつ。水がほとばしり出ること。（3）鑿痕 さつこん。鑿（のみ）の跡。（4）解頤 かいぎ。大いに笑うこと。

。九日、雨。

八時起。宮小路・乙咩来、午后、岩助来。相伴至其／宅、觀高簡淺絳山水、馮起震／馮可實合作竹／石図、八大山人秋林山。就中八大山人之輻宛然、（4丁才）／贗本不足觀、然如其図疎々取趣、可想見山人／構思之所異也。喫午餐而帰。柳橋来頗討／論絵理之妙奥。八百宗・高木・善十来。夜過十二時／即臥。此日肥人九江之東来、東于大城谷・松籟堂。

（1）岩助 拜山はこの日、岩助の宅を訪れ、高簡の山水画などを観覧した。二月十一日、十四日にもみえる。また五月九日には岩助子がみえる。（2）高簡 清、蘇州の人。字は澹游、号は旅雲山人（一雲山人）。詩を能くし、山水画に巧みであった。（3）馮起震 ふうきしん。明、益都の人。字は青方。経史に淹貫し、画に巧という。（4）馮可實 ふうかひん。清、益都の人。字は正卿。明の天啓の進士。清に入ってから隠居して仕えなかった。（5）八大山人 はちだいさんじん。明の宗室。名は奄。諸生。国変の後、僧となる。字は雪箇。个山・人屋・驢・屋驢・書年・驢漢と号し、後、八大山人と改めた。書及び画を能くした。（6）宛然 えんぜん。そっくりそのままであるさま。（7）疎々 そそ。おおまか、おおざっぱなさま。（8）九江 棍山九江（かじやまさきゅうこう）か。九江は肥後の人。一八三二―一八九〇。名は知、通称は栄太、字は子愚。別に崖泉と号す。父九嶽は四条派の

画人。南画を好み、豊後で淵野桂仙に、のち長崎にて僧鉄翁に師事した。「九江之東」は九江からの手紙。東は簡に通じて書簡の意。(9) 松籟堂 太宰府松屋の栗原孫兵衛の雅号が松籟堂である。「東」は前注のように書簡の意だから、ここは大城谷桂樵と栗原孫兵衛に書簡を送った意か。

。十日、雨。

七時。至清水寺、観盆栽会。舶来之松多、就中小簞之盆為最、価抵十八円云。毎花木／七八十種、紫檀⁽¹⁾、紫泥鉢、或青磁、或斑竹台、天然木、太湖石⁽⁴⁾、尽古色蒼秀、皆是豪商巨族／之所有也。実足驚心目。上室壁間、掛江稼圃⁽⁵⁾（4丁ウ）／寒鴉古木小軸。墨色淋漓、殊為傑作。次室床上、展王鐸書幅⁽⁸⁾。精神^(前カ)遒鼎、如走如飛、即究草法／妙奧矣。点茶席有文徵明水墨山水。灑々落々、与存世之筆迥異⁽¹⁰⁾、其体別成一機杼、只恨題字／太少焉。閱畢而過乙咩小酌。午後訪福田馬造⁽²⁾。／斯人精于彫刻、本豊后人、住長崎。技術無出其右者。／入夜呼杯話、両以取快。帰途至喜重楼、品書画／評古今而去。十二時掩衾。

(1) 紫檀 したん。インド原産の樹木。材が赤紫で堅いことから、器具・調度などに用いられた。(2) 紫泥 しでい。無釉陶器をいう。(3) 斑竹 はんちく。斑紋のある竹の総称。(4) 太湖石 たいこせき。中国蘇州付近の太湖周辺の丘陵から切り出される奇石。(5) 江稼圃 こうかは。生没年不詳。江戸時代後期の長崎に来舶した清人画家の一人で、日本に文人画の画法を伝えた。来舶四大家（伊孚・費漢源・張秋穀・江稼圃）に数えられる。名は泰交、字は大来・連山、稼圃は号である。二月十四日、十六日にもみえる。(6) 寒鴉古木 寒鴉枯木か。寒鴉（冬のからす、飢えたからす）と枯木。画題に用いる。(7) 淋漓 りんり。したたるさま、たらたら流れるさま。(8) 王鐸 おうたく。一五九二～一六五二。明末清初の書家。字は覚斯（覚之）、また号は蒿樵・十樵・石樵・癡庵・煙潭漁叟など。(9) 文徵明 ぶんちようめい。一四七〇～一五五九。明代の文人。詩書画に巧みで三絶と称され、画においては沈周の後を受け継ぎ、明代四大家（沈周・唐寅・仇英・文

徵明）に数えられる。幼名は璧（壁）、徵明は字（のち徴仲）。号は衡山、衡山居士、停雲生。二月二十日にもみえる。(10) 迥異 けいい。はるかに異なる。(11) 機杼 きちよ。詩文などに新体を案出すること。(12) 福田馬造 拝山はこの日、福田馬造を訪問した。馬造は元々豊後の人で長崎に住み、雕刻に精通していて、その技術では右に出る者がいないという。

。十一日、快晴。

七時。岩助来、少七⁽¹⁾・八百宗・乙咩来。午後（5丁才）／同訪宮小路、到八百宗宅。主人賀支那行、首／途饗応具。至十時帰寓。此日記元節也。

(1) 少七 二月十五日、十九日、二十一日、二十四日、二十六日、二十七日、三月三日、七日、八日、九日、十六日、十九日、六月二十四日、二十九日（少七、扇六本を携え来る）、七月三日（少七来る、相共に公園に到りて一酌、暮歸る）、十日、二十二日、二十五日にもみえる。

。十二日、快晴。

七時。訪肥後内田某⁽¹⁾、聞肥地靈巖洞之／説。訪乙咩、到八坂天神社内千歳巢。終日／画事、入夜呼杯、聞艶曲頗極妙。就中阿駒／才三、石川五右衛門処入釜之刑之曲、一弾一音／悽惋痛絶、情凝心苦、不覺絃然淚數行下。／此夜宿此巢。

(1) 内田某 肥後の人とみえる。拝山は肥後出身の内田某から、熊本の靈巖洞について話を聞いている。(2) 悽惋 せいわん。悲しみいたむこと。

。十三日、朗晴。(5丁ウ)

六時。起、帰寓⁽¹⁾。此日寓主品川岩三郎移居／於麴屋街。終日匆忙⁽³⁾。十二時就寝。

(1) 帰寓 前日は八坂天神社の千歳巢に宿泊したので、朝、帰宅したのである。(2) 品川岩三郎 この日、岩三郎が麴屋街に移居した。ここに「寓主」とあるから、拝山は岩三郎の所に寄寓していたとみられる。また、拝山の「筆

談録」のなかに「姓は品川、岩三郎と称す。長崎人。村泉と同処なり。蘇州を廻り、今、此の地に至るなり。此の地に住すること已に十日許。」との一節があり、中国において拝山と行動をともしにしていたことが伺われる。骨董商ではないかと思われる。なお、上記を参照すると、三月七日に「品川乗船す」とみえるのも、この岩三郎のことだろう。(3) 匆忙 そうぼう。匆忙とも。いそがしいこと。せわしいこと。

。十四日、半晴。

六時⁽¹⁾起。終日不出。只訪隣樓小野素外⁽¹⁾、見張⁽²⁾／秋谷墨竹、徐文長⁽³⁾少禽^(録夷)絲、仏墨画、稼圃小／景山水、唐寅書、竹田枯木第屋。皆小幅、絶／妙之傑作、無少疑色。別有半江田蕭米法山／水、華山渡辺之山水。是亦頗佳。岩助・八／百宗来。此日日夜有卜居賀宴、朝来杯盤／狼藉、家具散漫、室内雜沓、無容脚之地。(6丁才(別紙)

「 日誌(左手自筆)

拜山 三十三歳ノ時(十二年十二月／鼓山出生ノ／前年)

明治十一年二月長崎行、

四月一日 長崎出帆、

支那漫遊(蘇州杭州)、

六月二十二日 長崎二着ス、

八月 太宰府二帰宅、

入夜諸具位置漸整、主人設酒肴、一醉慰／勞。十時就枕。

(1) 小野素外 二月十五日、二十日、三月五日、六月二十四日、七月二十三日にもみえる。(2) 張秋谷 ちょうしゅうこく。生没年未詳。名は昆のちに莘。字は秋谷、のちに秋穀に改めた。江戸時代、長崎に来舶した清人画家の一人で、来舶四大家(伊孚九・費漢源・張秋穀・江稼圃)に数えられる。(3) 徐文長 じょぶんちょう。徐渭(じょい)。渭は諱。一五二一〜一五九三。明代の文人。字は文清、のちに文長と改めた。書・画・詩のみならず、詞・

戯曲・散文などの分野でも活躍した。(4) 唐寅 とういん。一四七〇〜一五二四。明代の文人。書画を能くし、呉中四才子(祝允明・文徵明・徐禎卿・唐寅)に数えられた。(5) 半江田蕭 岡田半江(おかだはんこう)。諱が蕭、半江は雅号である。一七九二〜一八四六。江戸後期の文人画家。岡田米山人の子。(6) 卜居 よい土地を求めて住居を定めること、またその住居をいう。十三日にみえる品川岩三郎の転居のことであろう。その後、賀宴(祝宴)が行われた。

。十五日、晴。

七時⁽¹⁾起。墨川^(山ノ頭)突然来。黒川平戸人也、為／長崎県警部官員。周章語日、「明日招／魂社有祭典、欲建紅白幟四張。限午後、／請書大字」。於是吾辭云、「書養心助神之／要道也。非沈着寧靜、不能焉。苟以匆々／成之耶。期明日諾之、君不聽、強請云、「日／有限、何暇他人乎」。事迫情切、固辭、即(6丁ウ)／諾矣。因飛車到讚井、命墨汁。帰途、／到宮小路 借大筆而帰、直到大音寺。／先借二三杯酒力、拳腕大書。時已薄暮、／呼燈照字、漸過七時而畢。帰寓、素外／笹山蕉川来訪。書画之道、頗究討／論。十二時就寝。此日松浦・少七・玉椿軒来。

(1) 十五日 この日、拜山は長崎県警部官員黒川に頼まれて、招魂社の祭典のための紅白幟四張の揮毫を渋々引き受けている。(2) 周章 しゅうしょう。あわてふためくこと。(3) 招魂社 靖国神社および護国神社の旧称。江戸末期から明治維新前後にかけて、国事に殉難した人士の靈魂をまつた各地の招魂場を改称したもの。(4) 大音寺 長崎市鍛冶屋街にある浄土宗の寺院。皓台寺・本蓮寺とともに長崎三大寺とされた。(5) 笹山蕉川 さやましゅうせん。一八二九〜一八九五。もとは近江小谷藩城主浅井氏の家系。長崎に移り、大村町乙名、出島乙名などを務めた。蕉川は明治五年(一八七二)学制発布に伴い官許を得て笹山学舎を創立、教育に尽力したという。二月十六日、十七日、二十一日、二十四日、二十五日、二十八日にみえる。

(6) 松浦 二月十八日、二十四日、三月十六日、六月二十七日、二十八日、二十九日、三十日、七月一日、二日、十四日、二十九日にもみえる。
(7) 玉椿軒 伊藤八百叟の号。

。十六日、晴。

七時⁽¹⁾起、訪笹山蕉川、觀史可法⁽²⁾、夏⁽³⁾仲昭竹、顔家廟帖、董玄宰書帖。／相伴過池原枳園、又誘枳園、至豪⁽⁴⁾（7丁才）／商高見素軒、閱覽所藏名軸。上⁽⁵⁾床懸⁽⁶⁾禧宗皇帝鷹図、兩壁左展蘇／東坡四季墨竹、有印無款。四幅之竹⁽⁷⁾兩／軸挿石為友、二軸抽筍。一軸上側掛一輪明／月、一軸積雪成堆、枝幹低垂、根脚以濃／墨点、枯木一枝、四時生葉、枯枝个分、魚／尾重密蕭疎、千状万態、實為稀世之／珍。胸中之塵氣、頓為之消除。此幅原／為崎陽崇福寺所有、有故墜商手。書画／之遭遇、亦有時哉。故別添一卷、其卷（7丁ウ）／黃檗派各名衲之序跋也。書体語氣、／都是脱然、亦足以想像當時。右懸呂紀／鷹逐衆鳥図⁽⁸⁾二大幅、董其昌金箋／絶句、無準僧書軸横卷。又有数種、一／眉山婦去來賦行書、一董其昌行書、／一趙子昂孔子家語図、一南京都城内外／之図、無款着色、細密精巧超脱、為明時／之筆。就中東坡行書、頗使人一見口流涎。／其他枝山⁽⁹⁾之書、查昇⁽¹⁰⁾之詩、王翬⁽¹¹⁾之山水、稼圃／之草書、逸雲⁽¹²⁾・梧門⁽¹³⁾之傑作、不暇枚挙也。（8丁才）／流覽已過亭⁽¹⁴⁾午、致謝与枳園・蕉川相別、／赴愛宕杜畔田口氏之招。入夜帰寓、十時／臥枕。此日招魂祭、満市塵煙、繁華百倍、弔／慰之人、雜沓群乱、不殊三都之壯觀也。

(1) 史可法 しかほう。一六〇二～一六四五。明末の政治家・軍事家。字は憲之・道隣。のち史閣部とも称した。拜山は、清国に渡つて、この史可法の墓を二度訪れてゐる。(2) 夏仲昭 かちゅうしょう。明代の画家。(3) 董玄宰 とうげんさい。董其昌(とうきしょう)。一五五五～一六三六。字が玄宰。明代末期の文人、書画に優れた。金陵九子(黄公望・陳繼儒・王思任・楊龍友・倪瓚・王時敏・夏雲鼎・孔尚任・董其昌)の一人に数えられる。号は思白・思翁・香光など。二月二十日、三月三十日にも、玄

宰とみえる。(4) 高見素軒 長崎の豪商とある。七月二十六日(高見)にもみえる。(5) 蘇東坡 そとうば。蘇軾(そしよく)。一〇三六～一一〇一。号が東坡居士で、この号から蘇東坡とも呼ばれる。中国北宋の政治家で、また文豪、書家、画家としても知られる。字は子瞻、諡は文忠公。(6) 崎陽崇福寺 崎陽は長崎の異称。崇福寺は現長崎市鍛冶屋町に所在する黄檗宗の寺院。(7) 趙子昂 ちようすこう。趙孟頫(ちようもうふ)。字が子昂。一二五四～一三三二。南宋から元にかけての政治家・文人。(8) 枝山 祝枝山(しゆくきざん)。明の学者。祝允明とも。文徵明とともに明代の能書家。(9) 查昇 さししょう。査升とも。一六五〇～一七〇七。清代中期の書法家、藏書家。(10) 王翬 おうき。一六三二～一七一七。清代初期の画家。字は石谷、号は耕煙外史など。四王呉恽(しおうこうん、王時敏、王鑑、王原祁、王翬、呉歷、恽格)の一人。(11) 逸雲 木下逸雲(きのしたいつうん)。一八〇〇～一八六六。江戸時代後期の長崎の南画家。長崎南画三筆(鉄翁祖門・三浦梧門・木下逸雲)の一人に数えられる。(12) 梧門 三浦梧門(みうらごもん)。一八〇八～一八六〇。江戸時代後期の長崎の南画家。前掲の長崎南画三筆の一人。(13) 亭午 正午・真昼。

。十七日、雨。

七時⁽¹⁾起。赴于花園鉄翁追庭。遇邇投／贈之書画、其数太夥、不遑枚挙。都／載縮摹帖、不贅于此。六時帰家。笹山／高木・柚木屋・宰府徳平来、到万／年亭一酌。十二時就枕。(8丁ウ)

(1) 鉄翁 鉄翁祖門(てつおうそもん)。一七九一～一八七二。諱が祖門、道号を鉄翁という。本姓は日高。幕末長崎で活躍した南画家。春徳寺住持。来舶清人の江稼圃に師事して南画を学んだ。長崎南画三筆の一人。(2) 徳平 宰府徳平とある。二月十九日、二十六日にもみえる。

。十八日、雨。

七時起、赴于花園、縮前日展覽之／書画畢、而松浦氏設別席、饗一杯。／帰寓、八百宗・乙咩来。至十二時就寢。／此日予州西条人与君樵⁽¹⁾始会晤。

(1) 君樵 続木君樵(つづきくんしょう)。一八三五―一八八三。伊予西条の人とある。幕末、長崎で木下逸雲、鉄翁祖門に学んだ。明治七年には中国に渡り研究を深めたという。拜山はこの日、始めて君樵に会った。

。十九日、晴。

七時起、終日不出、黒川・高木・八百宗・少七・徳平・石丈⁽¹⁾来、十時就臥床、此日、近世偉人伝来、

(1) 石丈 二月二十日、二十四日、三月三日、五日にもみえる。

。廿日、晴。

八時起。石丈・素外来。午后宮小路・乙咩来、(9丁才)／相携到浜町柚木屋小集、觀奉直大夫／梁同書⁽¹⁾屏風半双書。鍊磨頗至、其行／体在玄宰・微明之間。又閱周麟⁽²⁾之書／卷。其中八分体頗妙也。入夜帰寓、九時／臥枕。

(1) 梁同書 りょうどうしよ。一七二三―一八一五。清の書家。(2) 周麟 書家。隸書をよくした。

。廿一日、晴。

七時起。終日不出門。田中・笹山・深江・高木・八百／宗・乙咩・諸熊・少七^来。東京人佐藤篤⁽¹⁾、号／松雨書家也。携椰子、垢衣敝傘、頗見／流落。甚突然就坐、愀然吞氣低声(9丁ウ)／語曰、「日本全邦、自北陲西疆^至歴覽、無不／踏地、到处不遇、固囊中常瘦、殊多／艱困。就中昨客長州、老妻妊娠、月盈／而産不安、胎兒墜地、氣息閉絶、竟為／黄泉之客。生憎余応近隣豪戸之招、／友人以書因報老妻之危急、周章帰寓、／則噫、余已瞑目呼不答也哉。只恨生／前不能交一語、悲哉。加之生兒呱々⁽²⁾求乳／声不已^矣、生死至患一時迫身。客途無／復計之可施、進退殆谷。数十年間客(10丁才)／中之至苦、無過之者。所携物尽

散、而僅逐／亡妻生兒之顛末。因人之懇切以致我有／今日也。今所携先妻之子也、今年僅六／歳、未弁東西也。生兒則育無資割愛／而託人、只是二人一日送一日、到处呈拙／揮之書、請旅途之資用耳。伏願諒／此意、得寸惠、何幸加之哉」。言畢、老淚／点於膝上。於是余亦泫然者久之。即不堪／愍然、分所得之潤筆錢与、而返之。入夜／訪乙咩。又訪彭城芝香、時当小酌中。(10丁ウ)／乃傾數杯、帶醉而去。遂次又到鶴巢／居投宿。此日高木惠洋製煎茶器／械。

(1) 佐藤篤 東京人の書家で、号は松雨とある。(2) 呱々 ここ。赤ん坊の泣く声。特に生まれてすぐの泣き声。

。廿二日、陰、入夜雨甚。七時自鶴巢居帰、掃室焚香。境／井某来、携示黄道周⁽¹⁾書軸。頗妙／書格可与晋人争坐矣。即題一語云、／第一句云、扶輿清氣属吾曹、筆墨／際、心血之所注、亦如此焉、那待世之喋々／耶。午後訪磨屋街中教院寓居之(11丁才)／深江某・土井某。又到立石、談話數刻、／入夜帰。高木・黒川来。十二時乃臥。

(1) 黄道周 こうどうしゅう。一五八五―一六四六。明末の作家、能書家。

。廿三日、雨。

七時起。到区務所、乞支那之願狀。午后到／徳泰号、係添書之事也。入夜到彭城、談支／那行之事。十二時帰家而臥。此日彭氏供生／橄欖・清水查糕、皆珍味。芝香且云、「橄欖可／消十年中食之毒、其功驗太多」。亦贈愚父／以南京紅蠟并寿麵。

。廿四日、陰。(11丁ウ)

七時起。山本⁽¹⁾・高橋・少七・八百宗来、又三宝寺石丈。／四時到小曾根、不在。到徳泰号、取志清東。訪棚／谷丸山両家、与大瘦投永昌楼、以炙鶏小酌。到／宮小路、逢松浦・柳橋・笹山。脱場到彭城、逢鉅／鹿氏⁽³⁾。十二時臥。

(1) 山本 二月二十六日、二十七日、三月三日、九日にもみえる。(2) 小曾根 小曾根乾堂(こそねけんどう)。一八二八―一八八五。肥前長崎の人。

名は豊明。通称は六郎、栄。長崎の商人小曾根六左衛門の子。書画に長じ、篆刻に巧みで、特に隸書に優れていた。太宰府の町絵師萱島秀山の師。三月八日（乾堂）、六月二十日にもみえる。（3）鉅鹿氏 おおがし。長崎の地役人唐通事の家系の一つ。この時、拝山が逢ったのは、第八代鉅鹿篤義か。

。廿五日、晴。

八時⁽¹⁾起。岡田翁添翰来。晚翠来、乙咩来、共訪笹／山。又中尾直藏⁽²⁾、一覽古書画。就中古木図尤妙。／入夜高木来。訪黒川、十時臥。此日蒲生之文、／故園⁽³⁾家蔵書画郵到。（12丁才）

（1）岡田翁 岡田篁所（おかだこうしよ）か。篁所は一八二〇～一九〇三、肥前長崎の人。儒医。明治五年（一八七二）松浦永寿などとともに上海に渡り、文人墨客と交わり、その名を知られた。その折のことを記した『滬呉日記』がある。鉄翁、逸雲、梧門やその門人たちと親交、また来船清人とも交流した。吉嗣拝山編『太宰府廿四詠』（一八八四年）に序と評語を寄せている。（2）中尾直藏 拝山はこの日、直藏の許で古書画を一覧している。二月二十七日、二十八日、三月一日、三月四日にもみえる。（3）故園 ふるさと。（4）家蔵 自分の父の称。すなわち吉嗣梅仙のこと。

。廿六日、晴。

七時⁽¹⁾起。福田・彭城・岡田・寿光寺。徳平。少七／八百宗。浩潮。高橋。山本。終日不出門。夜一／時臥。此日少七ヨリ十円請取、又百円渡ス。

。廿七日、雨。

七時⁽¹⁾起。中尾直藏。春軒主人。少七。休／夕東阜。雲泉。山本。乙咩来。此日終／日不出。晩到中尾之寓⁽²⁾。十二時就枕。

（1）休夕東阜 三月一日、三日、十二日にもみえる。三月三日には紙屋休夕とある。（2）雲泉 内橋雲泉。拝山の筆談録にその名がみえる。蘇州や上海で古書画の買付などを行っていたと考えられる。三月二十三日、五月二

十日、二十四日にもみえる。

。廿八日、陰。

七時⁽¹⁾起。中尾来。訪笹山、相共⁽²⁾到村上藤兵（12丁ウ）／衛、一覽書画。梅花道人⁽³⁾。瘦瓢。朱文江⁽⁴⁾／又、観朱山。查士標。其他各輻⁽⁵⁾。又到／乙咩。高木。福井追至、談話過十一時。此日／古瘦齋七十五円。

（1）梅花道人 ばいかどうじん。呉鎮（ごちん）。一二八〇～一三五四。号が梅（梅花）道人。元代の画家。（2）瘦瓢 ひょうふう。黄慎（こうしん）。一六八七～一七七〇？。字は恭寿、瘦瓢はその号。揚州を中心に活躍した。（3）朱文江 しゅぶんこう。朱旭（号が文江）、あるいは朱華（字が文江）のいづれかか。どちらも清代の道士で画家。（4）朱山 しゅざん。清の画家。字は懷仁、号を寿嚴・蛻翁という。牡丹の水墨画に巧みであった。（5）查士標 さしひょう。明末清初の画家。

三月

。一日、晴。芝香。久布白良作⁽¹⁾。休夕。小田屋／光輪寺。平井。来。中尾直藏来、作筑行／之転書。晩至乙咩、酔倒不覚達旦⁽²⁾。

（1）久布白良作 くぶしろりょうさく。久布白兼徳。一八五七～一九四四。産婦人科医。佐賀本藩石井家に生まれたが、幼くして鹿島の医師久布白庚斎の養子となった。幼名を良作、長じて勝太、兼徳、号を桜外という。江戸で医学を学び、さらに京都・長崎等で医学をおさめたという。三月三日にもみえる。（2）達旦 たつたん。夜が明けること。

。二日、晴。午后到石痴、談話数刻。至暮／赴高木之招、相会者内田・支那人文達外一人。（13丁才）／清興暢発頗聲、歓呼奇々快々。十時又／到乙咩、談清遊之事。十二時臥。三日、晴。

〔頭書〕「福井渡／二十円／乙咩渡／十五円」

七時起。少七。久布白。対州樋口。石丈／来。高橋。山本来。十二時至乙咩、談航海／期。晚来⁽¹⁾応紙屋休夕招、同座人逢尾里／梅亭⁽²⁾。談朝鮮之風土、頗与我邦相似、十二時／臥。

(1) 晚来 夕方にかけて。(2) 尾里梅亭 おりばいてい。南画家。

。四日、雨。

七時起。乙咩・中尾来。深沢伊三次来。(13)丁ウ／午后到乙咩、談航海延期之事。又到深沢／萬傾一杯。十二時帰寓臥。此日前日両日、丸山有／盆栽会。

(1) 深沢伊三次 三月十七日、七月二十五日に伊三次とみえる。また三月四日、十二日に深沢とみえる。(2) 乙咩 拝山はこの日、乙咩に航海(清国渡航のことであろう)延期のことを話している。前日には航海の時期について話しているから、その続きであろう。

。五日、雨。

七時起。石丈。素外。彭城。浩潮。高木来。／終日不出。入夜到村泉、談支那之事。此夜昨／冬十二月五日ヨ本月五日迄、算所入之揮潤。

(1) 村泉 池島村泉(いけしまそんせん)。一八四四～一九〇七。肥前長崎の人。通称は嘉六、のち正造。号ははじめ尊泉、のちに村泉。家号は池正。木下逸雲に南宗画を学んだと伝わる。二十三歳のとき骨董商の家業を継ぐ。芦雁を描くことに長けた。三月九日、十日、十二日、二十五日、二十七日、三十一日、四月廿一日、二十三日、二十六日にもみえる。なお、三月十二日には「村泉の航海船、開帆す」とあり、また本史料の後の記述から、村泉も上海に渡っていることが知られる。

。六日、晴雨。

七時起。到乙咩、又到彭城呼杯。十一時帰寓。八百／宗来、此夜以拾円謝品川。

夜三時臥。(14丁才)

。七日、晴。

九時起。品川乗船。午后訪浩潮、至万屋、以紅／蠟托筑前便。訪乙咩、相共到田口耕味軒、／托航海之手段。晚帰、黒川・浦川・少七来。／此夜投三円托少七、以買荷箱之事。十一時臥。

(1) 田口耕味軒 拝山はこの日、乙咩豊水とともに耕味軒の許を訪れ、清国へ航海手段を托したとある。田口は二月十六日(田口氏)、三月十日、十三日、十五日(田口家)、十九日、七月七日にみえる。

。八日、晴。

八時起。送宮小路之帰。訪高木、帰寓。乾堂／。福田。少七来。入夜至乙咩。十一時就床。

。九日、晴。

八時起。村泉。少七。矢橋。中村。芝香(14丁ウ)／山本。八百宗。乙咩。宇都来。終日不出。入夜／九時就寝。此日聞小宇都保太夫為芸被妬、同／類蒙殺之事。此日女琴師小野与志来。

。十日、半晴。

七時起。村泉来、促出航。十時至乙咩、訪長／見光南、不遇。又到下町、赴田口之約。逢竹下／文太郎、托上海之事。又緩行期一周間。

。十一日、晴。

七時起、至池庄、又到八百宗逢作人中谷、終／日不出、入夜到彭城、十二時就寝、(15丁才)

。十二日、晴。

七時起。午后至五嶋町深沢。入夜竹下文二郎／来、齋呉硯之添書。休夕・八百宗来。十時／就枕。今晚村泉航海船開帆。

(1) 呉硯 呉硯三郎(ごせきさぶろう)。別名が呉硯。生没年不詳。幕末から明治にかけての外交官、通訳(通詞・通事)。肥前長崎の生まれ。明治七年(一

八七四) から明治十五年(一八八二)にかけて、上海領事館で一等書記生となつた。三月二十三日、二十四日、四月二十九日、五月一日にもみえる。

。十三日、晴。

七時。小田屋。浦川。田口。八百宗来。／午后到大音寺、訪乙咩、不遇。十一時臥。

。十四日、晴。

七時。午后到乙咩、至東浜町千代鶴宅。／入夜帰。八時臥。(15丁ウ)

。十五日、晴。

七時。高木。八百宗来。午后到田口家一酌。／入夜帰寓。此日寓有月琴合奏会。十一時臥。

。十六日、晴。

七時。午后訪芝香、至松浦晚帰。夜訪／竹下帰。少七・八百宗来。此夜齋銀錢十八／円。十二時臥。

。十七日、晴。

七時。竹下。乙咩来、相共永見江南、／取品川・大倉漆書。⁽¹⁾又至浜町村山、又至西(16丁才)／町品川、皆不遇。晚至伊三次一酌、帰寓。／乙咩妻来、有贈物。十一時臥。

(1) 品川 品川忠道。中国上海には、日本人の往来や居留民が多かつたことから、明治三年(一八七〇)に仮領事館が置かれ、仮の領事に品川が任命された。同四年の日清修好条規の調印にともない、翌五年一月二十九日、正式に在上海領事館が設置され、領事には引き続き品川が任じられた。

(2) 大倉 大倉雨村(雨邨、おくらうそん)。一八四五―一八九九。明治時代の南画家。越後出身。名は行。字は顧言。通称は謹吾。別号に雨邨、鉄農半仙。長崎で鉄翁祖門に文人画をまなぶ。明治五年清にわたり、上海領事館に十五年間つとめながら中国の画法を研究した。三月二十四日、二十七日、七月十六日、十七日にもみえる。

。十八日、晴。

七時。高木。宇都。内田来。至乙咩。／薄暮八百宗来、治行装了。時文達来、／預縮棉五反・東銀二百枚。夜至江戸町半田／屋、訪中谷某呼酒。十二時到汽船問屋鶴屋、／三時乘九重丸、四顧皆洋人也。水夫時来、立吾／側、看弄左手曰、「奇妙也。清人之運筆自在也」。／夜已尽、天色生白。(16丁ウ)

(1) 九重丸 この日、拝山は清国渡航のため、九重丸に乗船した。

。十九日、晴。

舟中茫然独坐、忽有贈者。乙咩。竹下佳隆／少七。田口。千代。高木。告別。十二時開帆。⁽¹⁾／天氣和暢、舟中如坐平地。此夜逢船長竹下佳／治、談話数刻、夜深就風枕。⁽²⁾

(1) 十二時開帆 この日、拝山は中国・清に向けて出発した。したがって、拝山の息男鼓山が記したとみられる挟み込みの文書に「四月一日 長崎出航」と記すのは何かの誤りだろう。(2) 竹下佳治 愛山が乗船した九重丸の船長。三月二十五日、拝山はこの竹下に手翰を托している。

。廿日、晴。

舟中平穩如坐地。

。廿一日、晴。

(頭書)「自此入海／外」

午后舟入揚子江、兩岸茫茫、⁽¹⁾低柳吐煙、人家／出沒、參差于其際。片帆摇曳、陸続四十里余、(17丁才)／河水皆黃色。汽船漸着大橋之下流。上陸至／虹口、散步新北門。上海城内外壯觀、粗与東／京可謂伯仲間。土地之広宏、人員之繁／稠、覺太勝于東武。薄暮帰寓、入夜喫飯。訪／西村于領事館内、談話数刻。十一時／帰寓就寝。此日購水晶眼鏡、価二合五勺。／又得蠟石鈕印一顆、価二合。(頭書)「眼鏡二合五勺／蠟印二合」

(1) 廿一日 頭書に「此より海外に入る」とあり、この日、拝山を乗せた船が揚子江（長江）に入り、上海に上陸した。(2) 茫漠 ぼうばく。ぼうつとしてはつきりしないさま。(3) 参差 しんし。互いに入り交じっているさま。(4) 摇曳 ようえい。ゆらゆらとゆれてたなびくこと。(5) 西村 拝山が領事館内に訪問しているから領事館職員のひとりであろう。(6) 領事館 明治五年一月二十九日に開設された在上海領事館のこと。

。廿二日、快晴。

午后、到城内外骨董舗、閱古器書画。薄／暮帰寓、購蠟印五顆、価一元。入夜
(頭書)「蠟印 老元」

呉(17丁ウ)／碩老人来。十二時就寝。

。廿三日、快晴。

八時起。午后訪馮耕三⁽¹⁾。錢子琴⁽²⁾来、談話數／刻。帰途訪雲泉。此日品川到寧波、
(頭書)「扇面／石摺 五合」

／内橋至福州。夜訪呉碩、不遇帰寓。／此日又逢鳩居堂安兵衛⁽³⁾、并小曾根
(母誤⁽⁴⁾) 震太／郎。十二時臥。
(頭書)「葦四本／六合」

(1) 馮耕三 ふこうさん。生没年未詳。筆墨商。来日経験をもつ。三月二十四日、三十日、三十一日、四月一日、五月二日、五月五日、五月八日、六月十二日、十三日にもみえる。(2) 錢子琴 せんしきん。錢懌。清の人。長崎に五回渡航した。日本では字をとって錢子琴と称されることが多い。拝山の上海滞在時期には、東本願寺上海別院において日本人と交流した。『拝山奚囊』(一八七八年)に詩歌が収録され、また評語も付したと考えられる。三月二十四日、二十五日、二十七日、五月二日、四日、五日、七日、六月十二日、十五日、十七日、十八日、十九日、七月十九日にもみえる。(3) 鳩居堂安兵衛 鳩居堂は書画用品・香等を扱う老舗。そこから清国に派遣されていたのが安兵衛であった。三月二十八日にみえる鳩居堂も安兵衛だろう。

また六月二十日には、帰国する拝山の同船者に鳩居がみえる。(4) 小曾根 震太郎 正しくは小曾根震太郎。小曾根乾堂の長子。星海と号した。

。廿四日、陰。

(頭書)「茶碗五ツ／植木鉢／一元三合」

七時呉碩。大倉来。午后王治梅⁽¹⁾・錢子琴⁽²⁾／陳子逸⁽³⁾・馮耕三来、筆代舌頗極清談。(18丁才)／入夜雨邨来、話北越之事。

(頭書)「筆五本／八十五錢」

(1) 王治梅 おうやばい。一八二九？。名は寅。太平天国の乱を逃れて上海に至り、丹青を以て業とした。上海の地誌『滬游雜記』(葛元煦撰、光緒二年・一八七四)に山水人物花鳥をよくするとある。上海を訪れた日本人がその書画を争い求めた。明治十年(一八七七)を含め三度日本に渡航、藤沢南岳ら京阪の文人と交遊した。渡清した拝山と現地で交遊し、『拝山奚囊』に詩歌が収録される。帰国する拝山と同船して来日した。三月二十五日、四月三十日、六月二十日、二十一日、二十二日、二十三日にもみえる。(2) 陳子逸 ちんしいつ。江戸時代、長崎に来舶した画人として知られる陳逸舟の子。子逸も来日経験をもつ。四月一日、九日にもみえる。

。廿五日、半陰。

七時起。到九重丸船長竹下托手翰。午后与村泉／繞城内外骨董舗、訪治梅。門外有嚴肅之／之行列、問之於治梅。々々云、「前任馮道台夫人／出喪」。棺蓋頗美麗、厚終之風俗尚存。／然前後之威儀錯雜、不堪見也。清国之／衰頹可想矣。帰寓、子琴来。入夜竹下／来。十一時就寢。

。廿六日、晴。(18丁ウ)

七時起。終日不出門。晚来至田代屋⁽¹⁾、談話數／刻。

(1) 田代屋 明治元年八月に上海で初めて営業を開始した日本の雜貨屋。陶器、小間物販売の商店であった。店主は田代慶右衛門、長崎で有田焼を扱

う老舗という。五月九日にもみえる。

。廿七日、雨。

七時起。至城内、与錢子琴訪毛祥麟⁽¹⁾。齊⁽²⁾／玉溪⁽²⁾。々々令嬢善画花卉。婦子琴寓、／午餐。又訪胡公寿⁽³⁾、談話数刻、帰寓。／入夜応呉春翁⁽⁴⁾之招。相会者大雨村、／池村泉、潔選餐洋製割烹。造化／奇論、々説盛起、笑語驚四隣。十一時／帰臥。(19丁才)

(1) 毛祥麟 もうしょうりん。清代画家。字は瑞文、号は対山。上海の人。
(2) 齊玉溪 せいぎょくけい。一〇八三〜?。名は学裘。安徽婺源(今は江西)出身の文人。『見聞随筆』の編者。扞山と於関わりでは、『扞山奚囊』(一八七八年)に序文を寄せている。(3) 胡公寿 こうこうじゅ。一八二三〜一八八六。上海の人。名は遠。号は瘦鶴、横雲山民。詩書画をよくする。上海に移住した後、上海画壇において名声を得、張子祥とならび称せられた。扞山との関わりでは『扞山奚囊』(一八七八年)に「骨筆之図」と詩歌が収録される。五月二日、三日、五日条にもみえる。(4) 呉春翁 広東省東路中丞。六月十日にもみえる呉春帆も同一人物。

。廿八日、雨。

七時起。終日不出。此日火船自崎陽来。入夜／鳩居堂。藤瀬来。十一時就寝。

(頭書)「一元六角／半 五部／書」

。廿九日、雨。

七時起。終日不出。此日品川自寧波来帰。

(頭書)「参角／手翰紙」

。卅日、晴。

七時起。耕三弟持綾子来。午后到耕三、／相共訪張子祥⁽¹⁾。々々甚愛古器物、座

(頭書)「綾子半／正三元」

／右之陳列頗多、不遑登錄。書画／有陳繼儒書便聯、玄宰山水軸、(19丁ウ)

／倪元璐⁽³⁾山水帖、王時敏⁽⁴⁾山水帖、其他／各種妙筆。又訪小石⁽⁵⁾。北方、入夜雜／話。十一時臥。

(1) 張子祥 ちょうししょう。字が子祥、号は鴛湖外史。一八〇三〜一八八六。清代の画家。長く上海に住み、鴛湖派の画風を確立、上海画壇において胡公寿とならび称された。(2) 陳繼儒 ちんけいじゅ。一五五八〜一六三九。中国明代末期の書家・画家。金陵九子の一人。董其昌の親友としても知られる。(3) 倪元璐 げいげんろ。一五四四〜一六四四。明末の官員で能書家。黄道周や王鐸とならんで明代の書道の名人と称された。(4) 王時敏 おうじびん。一五九二〜一六八〇。明末清初の文人画家。字は遜子、号は烟客。金陵九子の一人。(5) 小石 巨勢小石(こせししょうせき)。一八四三〜一九一九。近代の日本画家。本名八田金起。明治十一年(一八七八)には清国に遊学していた。なお、清国滞在中は、東本願寺上海別院に寓居していたのではないかと思われる。(6) 北方 北方心泉(きたかたしんせん)。一八五〇〜一九〇五。加賀金沢の人。号を心泉、雲迸、小雨、月莊と称した。浄土真宗大谷派常福寺十四世。書家、篆刻にも優れた。松本白華、成島柳北に学ぶ。明治十年(一八七七)から同十六年にかけて、東本願寺上海別院にて江蘇教校を設立するなど布教活動に従事した。帰国後は自坊に書斎文字禪室を構え、中国北朝碑文の書法を研究した。同三十一年にふたたび渡清、東本願寺の設立した金陵東文学堂の長を勤め、同三十三年に帰国。清滞在中、文人俞曲園(樾)と深く交流し、金石学を学んだ。『扞山奚囊』(一八七八年)の序を記す。四月十四日、二十日、五月二日、六月十三日、十六日、二十日にもみえる。

。卅一日。

七時起。耕三来、同車訪呉銓翰⁽¹⁾、筆／談数刻。又訪衛鏐生⁽²⁾、不在、空帰。午后到／龍華寺、相伴者窪盛之、東京人、／崎之村泉・里翠与余四人也。借小舟／遡于申江、々水澎湃⁽³⁾、打舟恰如泛／大洋。薄暮着龍華寺、前橋下維(20丁才)／舟登岸。寺僧導入禪室、供一椀茶。／僧侶三四輩、嚙々動口、似訝我

(1) 陳実夫 筆談録「以筆換談」(A15)に、号を実父といい、揚州で製硯の業に従事することを記す(1ウ)。

。七日、雨。

終日不出。

。八日、半陰。(22丁才)

終日不出。

。九日、陰天。

午后与李佩之・陳子逸、到天寧門外史閣／部古廟^①。々正面掲史可法肖像、七世裔孫／兆霖重所画也。兩楹聯句云、「数点梅花亡／国淚、二分明月故臣心」。其餘名家扁額頗多。／廟後有梅花嶺、雜樹疎々、極幽靜之趣。其／側即蕭孝子祠也。又到天寧寺、堂宇輪／煥、靜寂蕭然、懷昔感今。出寺、雨較簾纖／催鐘聲。催暮色歸寓。入夜李佩之又來、(22丁ウ)筆談數刻。十二時就褥。

(1) 史閣部古廟 史閣部は、史可法のこと。拝山はこの日、李佩子・陳子逸とともに史可法の墓を訪れたのである。(2) 兆霖 史可法の七世裔孫という。四月十二日には史兆霖とみえる。(3) 楹 はしら。丸く太いはしら。(4) 蕭孝子 自らの肝を割いて母の病を救い、孝子として知られた清の蕭日暉の墓。梅花書院のかたわらにあった。

。十日、陰雨、夜最甚。

終日不出。此日安中赴于蘇州。史華樓來、數／刻筆舌。

(頭書)「五角書帙／三角筆洗」

(1) 史華樓 史可法の末裔。

。十一日、雨。

午后到興教寺。為之先誘憑文甫。^①

(1) 憑文甫 憑は馮の誤記。四月十四日に馮文甫とみえる。

。十二日、半陰。

朝一廻市街古董店。到一古店、恰逢／朝鮮人。購品物、与店奴爭品価低／昂。高声相軋、路人止步、群聚其(23丁才)／際一時許。朝鮮人之巧支那語、舌滑(頭書)「古詩源解」

／口車搏、恰如豆丸迸盆上、流水奔板／面、実一奇事也。天已迫午、買麵／代飯。其麵以胡麻油煎之、混栗筍／茸雜菜。午后到史兆霖宅、謁忠正公／廟而歸。^①

(1) 忠正公廟 忠正公は史可法(史閣部)のこと。四月九日にみえる「史閣部古廟」に同じ。拝山は、揚州滞在中、史閣部古廟を二度訪れている。このことは『拝山奚囊』(一八七八年)所収「江南游草」の漢詩からも窺うことができる。

。十三日、雨。

終日不出。此日藤瀬洪生入舟。

。十四日、雨。

藤瀬赴于清江浦。午後与馮文甫至(23丁ウ)／平山堂。上頭四脚門側、壁上有「淮東第一／觀」四字。門額曰「栖霞遺址」。距天寧門五／里、四望平遠、野水縱横、岸々桃柳夾路、／舟行頗為妙。此日雨氣滿天、歸路雨／愈甚。往返与馮文甫一傘一車、泥途／太艱。路傍農舍散列、春草鋪野、寒／煙荒草、寥落廢蕪、与画舫録所云／大異。林苑堂宇、僅存一二耳。僧侶數／輩相集、供茶齋書画披展、以筆代／談、頗牽極閑雅。昔日歐蘇之風流、頓(24丁才)／牽傷今感旧之情。主僧心泉頗嗜書画、／作蘭石図、題詩贈余。薄暮出寺、四顧膿／溟、纖雨成霧。恨欠淮東第一觀覽。／此時茶小洋錢二十、即二角也。車夫三角、／馮子以三角抵雇資。十二時臥。

。十五日、雨。

終日不出門。

。十六日、午后訪蓮溪于萬壽寺。相伴者陳繼／仁・李佩之。⁽³⁾入門徒弟十余人、匆
 (頭書)「聖歎外伝四角／清婦写真四角／帳簿壹冊一角五元」

卒群走、報于師。／有暫入蓮師之室。齡可六十七八歳、白髯青(24丁ウ)／眼、
 容兒頗美、身丈甚大、言語溫藉、頗有柔／順之風。開食洋煙、故不免支体之衰頹也。

(1) 蓮溪 蓮溪真然(れんけいしんねん)。一八一六―一八八四。清時代
 後期の僧。字が蓮溪。画によつて生計を立て、花卉・山水等を得意とする
 他、篆刻にも巧みであつた。揚州周辺に居寓した文人たちと盛んに交流した。

(2) 陳繼仁 陳子逸のこと。繼仁は名。(3) 洋煙 阿片のこと。拜山は、
 蓮溪が阿片を使っているので、体の衰退は免れないと記している。

。十七日、雨。

終日不出。徐少玉来。少玉此日將泰州、即／告別。因相共語離情、互賦詩、慰
 半日之／客情。

(1) 徐少玉 じょしょうぎよく。拜山はこの日、少玉が泰州に帰るに際し
 て惜別の情を漢詩に詠んだ。この詩について、「江南游草」の草稿に「和徐
 少玉韻惜別」あるいは「和徐少玉韵」がみえるが、『拜山奚囊』(一八七八年)
 所収「江南游草」には採られていない。

。十八日、半陰。終日不出。

。十九日、晴。

終日不出。

。廿日、半陰。(25丁才)

朝吃飯、至平山堂。心泉外出、寄山邀余、／周章具至、互唱和。午後供麵、風
 味頗／佳。畢而一覽第五泉井帰堂。時有江／南巡撫使来、寺中僧侶匆卒出迎。
 ／頗見使官有威權。此日邂逅于東久／人道士朱瑞臣⁽²⁾、篆書刀刻家。日暮／見法
 海塔而帰。入夜逢程啓華⁽²⁾。此人／官楊城、頗善書画。

(1) 朱瑞臣 東久人道士、篆書刀刻家とある。(2) 程啓華 楊城の官吏で、

書画をよくするという。

。廿一日、陰、入夜一雨沛然。⁽²⁾

(頭書)「印匱一元」

終日不出門。(25丁ウ)／入夜与村泉・品川⁽³⁾相話談中、村泉話云、「舍弟／文太
 郎及広西行事。広西之地邦人未至之地、／土人見外國人、則擲小石、群聚拳声、
 頗激／怒。往来甚困難、久不留而帰。嗚呼不開之／地、可想見。後憶之、股票⁽⁴⁾
 髮豎」。又云、「舍弟／至福州時、与大坂人同往。至福州、坂人受疫而／死。海
 外孤行、四面生客、無復一人之憐。此困／苦坂人死而至埋葬、千苦万心殆進退
 維谷。／時有西洋人、与逆旅対門、時々来看病。／懇切叮嚀、其情義一父之子、
 未至如茲矣。(26丁才)／不唯共奔走周旋而已、為死者費許多之資。／此時旅
 寓忌疫、頗辞日本人泊宿甚刻／烈。不得淹留、殆無地措身。此時西洋人又酌／
 察其情、誘帰同寓。実可謂尽矣。開国／之与未開国、其人情之優劣、豈齊雲壤
 ／之異耶。後我邦領事館、聞此事、厚／謝于西人。政府之注意亦深哉」。此事
 雖些微、／交道之大緊要也。故附于此。

(1) 廿一日 ここで語られる文太郎の体験談については、解題参照。
 (2) 沛然 はいぜん。雨の一時に盛んに降るさま。(3) 品川 品川岩三郎。
 四月二十四日にみえる品川も岩三郎であろう。(4) 股票 こりつ。股僕とも。
 あまりの恐ろしさに股がふるえること。非常に恐れおののくこと。(5) 生
 客 せいかく。初めての客。(6) 逆旅 げきりよ。旅人をむかえること。旅館。

。廿三日、晴。^式

終日不出。許若連来。年七十五、雄氣勃勃、(26丁ウ)／不減少壯之人。自云、
 (頭書)「二角扇骨」

「以武雄視一世、疊瓦十／片、一手擊可以碎。日食豚肉五斤」。能書古／雅有味。
 筆談数刻、即去。

(1) 許若連 年七十五にて少壯を減せず、また自ら言うには、瓦十枚を碎

く力があり、日に豚肉五斤を食する、とのこと。だが一方、能書家でもあり、その書は古風・優雅で、拝山は数刻筆談した。

。廿四日、晴。

終日許鴻老人⁽¹⁾来。午后隣壁有一客。自前／夕同棲、風儀頗好、衣服携品、亦類(頭書)「三角印材／三角／憺園詩集」

中人以／上。時々来余席、如有意於文墨。齋所携／之紅茶寄呈、去又有暫而来、傍觀作事画。／乃席間插椅子、与余对坐。時有鏘然成／声者、始音小而如遙、其声及二三次。揮写(27丁才)／之際、熟聽則其音響於客之腰下／左側。因閣筆伸首、自椅下窃窺客／之腰、有一囊。客手入囊中、暗探所入／之銀貨也。於是吾心愕然、驚起直握客／手、大声冒曰、「咄、賊奴、掠人眼欲盜去貨物。／其罪不可許、殺之猶有餘」。憤然怒叱之／際、村泉兄自外来、驚而就坐。余只呼賊、呼／賊、相共握兩手、策賊數回。隣壁并全家／人々驚来、聞事之顛末、乃亦大驚。吾亦大／声呼品川兄。周章奔来見搔擾(27丁ウ)／之状、憤然怒。乃三人相聚、村兄攫賊之髮、／吾与品川兩人格擊賊頭。賊拳声／叫悲。鍵賊之携物、待旅舍主人之婦、／議為処置。時較過陳氏婦舍、主亦／從至、叩頭謝罪。(頭書)「一角印」

因檢賊之行李、直放／逐門、事即息、亦是一奇。盖賊／所探之囊、乃村泉所有也。行旅之／賓客不可不深注意也。

(1) 許鴻老人 許若連のこと。

。廿四日、晴。

終日不出。(28丁才)

。廿五日、雨。

朝一周城内遊覽各^(前アルセ)、就中府学宏大、巨門広宇、／如一官署。門左側有石門、(頭書)「三角／板橋雜記／半元／板橋詩集」

遍額云、「聖域」。自門／内窺見、則庙宇穆々、応是孔聖庙、并群／賢祠庙也。

武文之盛可以見焉。此日藤瀬白／清江浦帰来。

。廿六、晴。

朝欲買舟去維揚、村泉待古玩家来。過午／尚未至、至晚漸来。因緩一日之帰期。此夕泉／得^村一奇軸。就本豎装、題款云、「戊辰冬(28丁ウ)／日朱凱」。山水枯

(頭書)「三角／金威書」

木森密、生意渾然、筆致／自在、取法於大痴、学意於倪家、全山都無／一点着根脚踏括結、真可謂能神兼品矣。／未詳其伝、不知其為何代為何人也。今録／以質諸博雅之君子。此価一拾塊。

。廿七日、快晴。

朝出邗江客棧、買舟下江。過瓜州入長江、兩岸／芳草、淡煙漂渺⁽¹⁾、青色接天。舟出長江、遙望／金山・蕉山。煙霞靄々⁽²⁾、峰巒出沒⁽³⁾、淡粧濃抹⁽⁴⁾／之景、宛然浮水面如美人之初出浴也。即有詩、録(29丁才)／別冊。日夕着鎮江府、投六吉園、終晚餐。此日一周／鎮江城、内見巨鯉、長七八尺、鱗大如天保銅貨。此／地四方前控長江、左右帶金焦之勝、四方舟楫／之所聚、人煙繁茂、居然一都會也。夜九時乘火／船。乘客頗多、雜沓混乱不可言。借一室而占閑／処。室内鮮潔、不知身居舟中也。

(1) 漂渺 ひょうびょう。漂渺。遠く微かなさま。遥かに広いさま。(2) 靄々 あいあい。もやのかかるさま。(3) 峰巒 ほうれん。山々。つらなつた山。(4) 淡粧濃抹 たんしょうのうまつ。美しい女性の容貌や装いのこと。「淡粧」は薄い化粧、「濃抹」は濃い化粧。どちらも趣があつて美しいということ。

。廿八日、晴。

舟中四時着上海。田香谷来、与越中魚／津人寺田来。弁舌如流。夜到十二時臥。

(1) 田香谷 村田香谷(むらたこうこく)。一八三二～一九一二年。南画家。筑前国博多の生まれ。本名は村田叔。父村田東圃に画の手ほどきを受けた。安政元年、長崎に遊学、鉄翁祖門に入門、木下逸雲らの教えを受けた。その後、三度、中国に渡り、張子祥、胡公寿に学んだ。香谷もこの時、上海にい

た。四月二十九日にもみえる。(2) 寺田「越中魚津人」とあるから、冒頭の書込にみえる寺田久米次(寺田掉月)のことであろう。

。廿九日、晴。(29丁ウ)

朝至公館吳碩翁先生。到田香谷寓、見昭代叢書・大明繹史。午后松本氏⁽¹⁾／本願寺／徒之人、香谷来。香谷談云、「前年安田某⁽²⁾／至得^{柳州}一贖本、売之於陸軍官島尾某。／某珍之甚於金石」。古玩家之眩人可恐。非／大具眼人⁽³⁾、容易不可下手也。

(1) 松本氏 松本白華(まつもととはつか)。一八三八～一九二六。加賀の人。名は皀。別号は梅隱、西塘。松任の浄土真宗大谷派寺院本誓寺に生まれる。明治十年(一八七七)～十二年には上海の東本願寺別院にて布教に勤め、拝山も清国滞在時には、この別院に出入りしている。(2) 安田某 古物商の安田鶯谿か。(3) 具眼 ぐがん。眼識を具えている。見識がある。

。卅日、雨。

午後訪治梅、数刻談話。夜内海来、越前敦／賀人。

(頭書)「小印三顆／二角」

。五月一日、晴。(30丁オ)

午後至走馬場。此日九十動身。⁽¹⁾

(1) 動身 旅行などに出発する、旅立つこと。

。二日、晴。

午後訪耕山・子琴、又訪公寿對話移時。／又到本願寺、逢松本・北方・内海。

(1) 本願寺 浄土真宗東本願寺上海別院。明治九年(一八七六)、浄土真宗東本願寺が、清国布教のために開設した。

。三日、晴。

午后訪胡公。

。四日、晴。

訪竹禪⁽¹⁾老衲。午后子琴来。

(1) 竹禪 一八二五～一九〇一。清末の臨濟宗の禅僧。なお、老衲は年老的いた僧侶のこと。

。五日、晴。

午后見城内園中蘭花会。蘭蕙各種不遑⁽¹⁾(30丁ウ)／枚挙、問価^有到万金者。此園平日閉鎖、有／韻事⁽²⁾、即開放。人衆如織、其盛不可勝／言也。訪公寿・子琴・耕三帰。

(1) 蘭蕙 らんけい。香草。蘭と蕙。(2) 韻事 いんじ。風流のあそび。詩歌書画などの遊。

。六日、晴。

午后訪王道・竹禪・衛鑄生・吳翰潭。

。七日、雨。

終日不出。此日内橋雲泉自福州来、安井土岐／十郎到長崎。子琴来訪。

。八日、雨。

午后訪王道、到吳詮、与耕三逢^又。訪松(31丁オ)／本氏。

。九日、晴。

午后訪吳詮翰潭、又訪王道。々々出日内所／属書、且記小洋一元潤筆。吾乃把筆謂王／道云、「余所請各家画牋、無一投潤格。必要／潤乎、余亦不要書」。欲去、王道牽衣留我。赧／色溢于面、強贈所書之物。乃携而帰、又訪衛／鑄生。此人貪潤甚刻。此日岩助子・深山来田／代屋。

(1) 九日 拝山はこの日、依頼した揮毫の書を受け取るために王道の許を訪ねた。拝山はすでに五月六日、八日に王道を訪ねており、いずれかに揮毫を依頼したのである。なお解題参照。

。十日、晴。(31丁ウ)

午后訪鞠潭、又到崎陽洋行。⁽¹⁾ 与／寺田決西湖行遊之約。此日品川自揚州／帰。

(1) 崎陽洋行 町田実一『日清貿易参考表』(一八八九年)に「崎陽号」の記載があり、これが崎陽洋行のことであろう。それによると、崎陽洋行は上海にあり、開店が明治五年(一八七二)正月、営業等は「前同(注釈者注…陶漆器及小間物)及委託販売(長崎県庁ノ保護ヲ受ケ上野弥七郎其外三四名ノ組合ニテ設立シタルモノナリシガ■比ヨリ上野弥七郎一人ニテ引受ルコトニナリシト聞ク)上野八十九年夏比死去」とみえる。また、上野の死去に伴い、明治十九年に閉店したらしい。

。十一日、晴。

終日不出。晩暮到公館呉氏。

(頭書)「印材三顆／四角」

。十二日、晴。^半

午后到寺田。

。十三日、晴。

出門不遊。此夜到本願寺、与松本西塘談論古／今書画、頗壯快。(32丁オ)

。十四日、終日不出。此日晴天。

。十五日、晴。

午后至海岸、僱西湖行舟。時価自／蘇州至杭州九塊半。帰途至本願寺、／与松本兄談話、頗論書画。

。十六日、晴。

終日不出、成西湖行装。⁽¹⁾ 入夜寺田來投。

(1) 行装 こうそう。旅の支度。旅装。

。十七日、雨。

朝八時与吉堂・掉月携行装入舟。溯蘇州／江行五十里、風惡不能盪櫓、泊舟草岸無(32丁ウ)／人之地。深掩蓬窓、四面不見、天涯一孤舟、／情況索然。⁽²⁾

(1) 吉堂・掉月 拜山はこの日、舟で蘇州江を溯り杭州に向かっているが、その同行者が、内海吉堂(うつみきちどう)と寺田掉月(てらだちようげつ)であった。(2) 索然 さくぜん。こころひかれるものがなくて興ざめするさま。

。十九日、晴。^八

帶残月推舟、行百三十餘里、泊舟六界邦。／薄暮到玉皇殿、逢道士拍屏、贈一詩以／去此地。隔岸之處、曰、天灯邦。風景較佳。

。十九日、陰。

十二時至新陽県小西門、右有崑山(一名／云馬)／〈鞍／山〉類液地理部云、風雨晦溼、頂上有佳氣、突出／田間、亦是一勝概也。行数十里、有湖甚大。此(33丁オ)／処分派以石堤界川湖。日暮入姑蘇城外、閶門外／泊舟。

(1) 佳氣 かき。めでたい氣。嘉氣。

。廿日、雨。

朝入城内、訪顧左泉不在。弟美卿在家、筆／談數刻、情話甚親。至午以精饌供午餐、／待遇厚懇。食畢而訪顧俊叔、一遊怡園。／園中各種栽植、陳列書画古器、實極其／盛、不遑枚舉。心目頗眩。帰途訪雲泉於／姚泰昂客棧、晚入舟。

(1) 顧左泉 こさせん。岡田篁所『滬呉日記』にみえ、篁所が清国で行った診療に同席し、またその兄鑑亭の診療を依頼している。蘇城内干将坊讓王廟の近隣に住まいしていた。五月二十二日にもみえる。(2) 美卿 顧美卿(こふけい)。顧左泉の弟とある。拜山は美卿と数刻にわたって筆談をしている。(3) 顧俊叔 こしゅんしゅく。字は樂泉。篁所『滬呉日記』にみえ、それによれば篁所が長崎で知遇を得た金嘉穂の友人といい、篁所の診察を受けている。蘇州の名庭園の一つに数えられる怡園に住まいしていた。五月二十二

日、二十四日にもみえる。

。廿一日、晴。(33丁ウ)

朝登城外虎阜、觀千人石、或唐伯虎⁽¹⁾／龍席⁽²⁾二字刻石。午時至楓鎮、一遊寒／山
(頭書)「赫石膏／粉合三丁／価一元」

寺・楓橋。歸路過劉園。々中之花木／竹石書画珍玩、真極精妙、心目為之／不
得不眩迷。至晚歸舟。

(1) 唐伯虎 唐寅(とういん)。字が伯虎。一四七〇〜一五二四。明代の文
人。書画を能くし、吳中四子(祝允明・文徵明・徐禎卿・唐寅)の一人に数
えられた。

。廿二日、晴。

朝至顧左泉・顧俊叔。々々家藏古書画、頗／多矣。其中觀石涛⁽¹⁾老人山水帖、石
田漁槎／図卷、王逢心・傅山書卷、李鱣⁽²⁾花卉／卷、張大風書卷、皆精妙超脱、
使人神(34丁才)／散魂飛。又米鍾⁽³⁾万古栢行書卷最／秀絶。余□在邦屡見
米氏書、今与／此卷無少相肖之处、愈信真本之／難得、而贗本之欺人。古人之
筆墨、豈／可容⁽⁴⁾易得哉。

(1) 石涛 せきとう。一六四二〜一七〇七。清初の代表的南宗画家。八大
山人と並び称される。(2) 石田 沈周(しんしゅう)か。号が石田で、沈
石田の呼称でも知られる。一四二七〜一五〇九。明代の文人、書画家。門下
より以後の蘇州画壇を指導した文徵明、唐寅などを輩出し、吳派の祖として
後世の画家に重んじられた。(3) 王逢心 王蓬心(おうほうしん)の誤。
清の画家、王宸。号は蓬心。清初の画家王原祁の曾孫で、山水画を巧みに
した。(4) 李鱣 りせん。清代中期の画家。揚州八怪(汪士慎・李鱣・金
農・黃慎・高翔・鄭燮・李方膺・羅聘)の一人に数えられる。(5) 張大風
張風。字が大風、号は真香仏空。明清の交代の混乱を経験した遺民画家。
(6) 米鍾万 米万鍾(べいばんしょう)の誤か。万鍾は生没年不詳、明末

の画家、書家。字は仲詔。号は石隱、友石。

。廿三日、晴。

終日不出。夜舟中、沈秉剛⁽¹⁾。美蔭伯来。舟／興殊多。

(頭書)「扇面帖／一元」

(1) 沈秉剛 筆談録『筆舌簿』(A12)には、浙江紹興の人で、幼年より
申韓刑名の学を修めたと記す(21ウ)。(2) 姜蔭伯 筆談録『筆舌簿』(A1
2)によれば、虎邱へと続く繁華街である山塘街の通貴橋附近に住まいする
人(21オ)。

。廿四日、晴。

朝入城内、訪顧美卿。吃午餐、相共到三(34丁ウ)／清殿。堂宇龐頽、更不加
修繕、只土地広莫／而已。又一覽潘東園。此園古甚盛大、今較属／寥落。歸路
訪苞旭庭⁽¹⁾。々々之家曾為道／臺、屋宇甚大。又到顧俊叔。至晚訪雲泉、一／杯
取快。樓主妻善湖弓、訳子弄笛、頗成／仙境之想。夜十二時入舟。

(1) 苞旭庭 蘇州の人で、筆談録『筆以換舌』(A14)によれば、
前出の顧美卿の岳父(1オ)。

廿五日、晴。

早曉舟発姑蘇城外、行七里、泊小村⁽¹⁾側／過吳江、泊八尺。

廿六日、雨、午后晴。(35丁才)

舟出八尺、過平邦、泊王江金間店橋／畔。此川云、塘河。夜出舟、臨清流、洗
犢鼻／褌⁽¹⁾。

(1) 犢鼻褌 拜山は、杭州に向かうに際して岳崎正純から犢鼻褌を贈られ
ているから(岳崎『支那在勤棟志』)、ここにみえる褌はそれであろう。岳崎
は東本願寺の僧侶で、明治十年七月〜同十一年五月まで東本願寺上海別院に
住した。

。廿七日、半陰。

過嘉興府五龍橋、行一百里、日晚泊舟。岸上人／家三戸、兩岸無雜樹、桑葉萬枚、蒼色接／天。舟中之人、皆欲青矣。

(1) 日晚 にちばん。日ぐれ。

。廿八日、晴。

舟過石門県、日晚泊。

。廿九日、雨。(35丁ウ)

入杭州城外、泊舟。

。卅日、雨。

至西湖、宿靈隱寺。^{(寺)僧}々東州雲峰待接甚厚。

(1) 東州雲峰 靈隱寺の寺僧。

。卅一日。

出雲林寺、過三笠、過六橋、至孤山吃飯。午後／泛舟、遊了全湖。

六月

。一日、晴。

朝入武林門、一覽城内、至吳山第一／峰。出湧金門、買舟一遊孤山・平^(36丁才)

／湖秋月・臥龍橋・畢葛嶺^(命カ)、至／晚帰舟。

。二日、晴。

曉舟発杭州城外、至石門県・德清県両界／石標之下泊舟。々中回顧湖山而去、

猶不堪／恋々之情。

。三日、晴。

舟路一百十里、到紅廟而泊。兩岸桑樹森／々、上隄一望四顧、時有水兵五七名、來相親。／中有一兵少解字、入船房來、暫以筆談(36丁ウ)／。説有云、「嘉興^府軍營之水兵。行路／中到处泊舟之地、無不有船^兵、散布各処、／海防水警。

此地離嘉興府、僅五里餘」。

。四日、晴。

舟発紅廟、至^過嘉興^興善府、至嘉善県而宿泊。夕陽／尚高、一覽城内。城之周圍楢田、人家疎布、／傍水結屋。舟楫往還、商賈雜沓、成小繁華。

。五日、霽。

朝搭舟去嘉善県。此日以係端午、船中挾菖／蒲、食角黍。其式与我邦同。舟行僅四[■](37丁才)／十里而休、卸錨於水中央。兩岸芦葭蒼々、／距人家甚遠矣。

。六日、風雨。

江水激怒、舟帆倒傾、波高風烈。三十里^四／而泊黃歇浦之派流。⁽¹⁾

(1) 派流 はりゅう。派川、分流とも。幹川から分派して直接海に入るか、再び幹川に合流する川。

。七日、陰天。

舟行八十里泊小江村側、此日終日看／鳳皇山、過此嶺有堂宇、西洋人構／耶蘇堂云。

。八日、晴。(37丁ウ)

舟着上海城外、買車子到永昌洋行。⁽²⁾／日暮到崎陽洋行。

(1) 八日 拜山はこの日、杭州方面から上海に戻ってきた。(2) 永昌洋行 町田実一『日清貿易参考表』(一八八九年)に商店「永昌号」がみえ、これが「永昌洋行」のことであろう。それによると、永昌洋行は明治十年(一八七七)七月開店、営業等は「陶漆器及小間物」とある。同十三年十二月に閉店したという。

。九日、陰。

朝録江南遊草⁽¹⁾。午后到鞠潭、謀著着述之／事。又到崎陽洋行、逢三次郎進福州／行。

(1) 江南遊草 拜山が江南遊覧にかかる漢詩をまとめたもの。後述するよ

うに、これは『拝山奚囊』に収録された。

。十日、到本願寺帰。此夜訪吳春帆翁。田辺／君来。十時帰寓。文太郎自福州帰来、伴婦／人二人来。聞其故、二人婦長崎人也。母子相／恋々、子歳可二十、容色艷媚。母歳五十左右、(38丁才)／娘名曰大倉、曾因西洋商客之聘、在福州二年／餘。母相逢之念不已、单身自長崎来上海、直到／火船、欲到福州与大倉遇。途次火船着温州府／時、文太郎者自福州来舟、又着温州上陸、欲買／故玩。因知自上海火船来、使通事某問日本之／乗客、有一婦人可五十。此時文太郎与阿倉／同乗。阿倉曰、「是可吾母曾以手翰約来福州／未来、故吾之到上海、欲逢母耳。願詳其婦／何人」。於是文太郎又到船紮之、則阿倉之母／也。因向老婆曰、「嫗之欲逢者、乃在我舟、速来而(38丁ウ)／可面」。母聞之、一喜一悲交迫、淚痕溢眼、相共／到船。阿倉見母、又淚点如雨、互相見而悲／泣、不言数刻、茫然不知所為。一心相思之念／凝、而有不可形状者、母子之感喜、亦可想矣。／嗚呼、去来異船、相見於一港、母思子、々思母／之念、相合而成此奇遇、亦是天也。然文／太郎当其際、百方尽力、亦可謂能助而作／此奇遇矣。苟非厚於人倫者、安能如此／乎。吾太有所感、故錄大概、以借他日之／談柄。(39丁才)／又有一奇事、不忍言之事。文太郎到温州。／山西之人六人歳八九歳、一人之男子統之。其体／不尋常、因問其故、一男子答曰、「我輩買六／人女子、欲売之於他所也。今年山西大饑、百／物食尽、近至食藁。已無生路、因買人甚廉。／此子売人一斥四十錢也。以分量買人、古来未／聞。甚哉、饑寒至此極也」。鎮淚滴々聞之、／当不能止泣。況於饑人之身乎。

。十一日、晴。

終日不出。午后汪培五汪昌績来。杭州府仁和県人。(39丁ウ)／来話頗有雅致。

(1) 汪培五 おうはいご。昌績は培五の号なので、二字目の汪は衍か。吉嗣家資料には、昌績が記した拝山宛の書簡(明治十一年)が遺る。六月十二日、十三日、十七日にもみえる。

。十二日、晴。

訪汪昌績・子琴・耕三。又与寺田到鞠潭。又／到本願寺帰。

。十三日、晴。

朝謁人、并汪昌績・耕来。午后到城内、買各／品帰。入夜北方氏来話。

(1) 謁人 孫士希(そんしき)。字が謁人。明治九年(一八七六)、東本願寺が上海領事館内に設置した中国語学校の南京語教師。東本願寺上海別院にて日本人と交流した。拝山との関わりでは、『拝山奚囊』(一八七八年)に詩歌が収録され、『太宰府廿四詠』(一八八四年)に序文を寄せたことが知られる。

。十四日、晴。

到田辺、托蘇州美卿信書。到崎陽□与三／次郎看古書画、有尺牘四五百円上品。

(40丁才)

。十五日、晴。

終日認三二郎福州行画。日暮子琴・^(庚カ)□洲／二君来。

。十六日、晴。

終日録著述草稿。晚来到本願寺、／謀北方^(刊)行。帰途到西洋花／園而去。

(1) 草稿 『拝山奚囊』の草稿。『拝山奚囊』(一八七八年)は、清国で拝山が交流した文人等が骨筆に接して詠じた詩文を収めた「骨筆題詠」、及び拝山が上海滞在時、また揚州・蘇州・杭州巡遊の際に詠じた詩文を収めた「江南游草」「江南游草後」からなる漢詩文集。この日、拝山は『拝山奚囊』刊行について、浄土真宗東本願寺上海別院の北方心泉に謀った。

。十七日、晴。⁽¹⁾訪汪昌績、又到城内、托子琴／^(刊)行之事。又訪齊玉溪属序。

(1) 十七日 拝山はこの日、銭子琴に『拝山奚囊』刊行を托し、また齊玉溪にその序文を依頼した。前日には北方心泉に刊行を謀っているが、実際に『拝山奚囊』をみると、齊玉溪が序文を寄せており、もう一つの序文は心泉が稿を書き、それを子琴が揮毫していることが確認できる。『拝山奚囊』は

明治十一年（一八七八）、上海において刊行された。

。十九日、陰。（40丁ウ）

終日不出、成子琴囑画。

。廿一日、陰。

束装多事。午后到三次郎。又到本願寺／北方、又訪深山山□瑞巖、途遇子琴。

。廿日、陰。

帰装多事、到本願寺告別。此夜火船／船^{（船出）}上海。同船寺田・鳩居・小曾根・王

治梅、／其^{（脱アルカ）}日本人、合計十餘人。

（1）廿日 拜山はこの日、上海を出立して長崎へ帰国の途についた。同船したのは寺田久米次（掉月）、鳩居堂安兵衛、小曾根辰太郎、王治梅らであった。六月二十二日夜十時に長崎に到着した。

。廿一日、晴。

舟中与王治梅筆談、頗極快。（41丁才）

（1）廿一日 拜山は、長崎への帰国途中の船中で、王治梅と筆談した。「頗る快を極む」と記している。

。廿二日、晴。

舟中風波平穩、夜十時着長崎、至半田屋。／同宿寺田保平^{（1）}。治梅。三人也。

（1）保平 拜山はこの日の夜十時に長崎に着いた。半田屋に同宿した一人がこの保平であるが、他の同宿者である寺田、治梅とともに同船して帰国した人物であるから、あるいは保平は、鳩居堂安兵衛のことか。

。廿三日、晴、入夜雨。

朝到税関領荷。午后与治梅^{（1）}・組谷到／公園。訪芝香、相共会千秋亭、極快時。／来者古瘦・玉椿・高木也。

。廿四日、雨。

朝訪少七、到品川・素外、帰半田屋。夜／高木・少七来話。（41丁ウ）

。廿五日、雨。

朝束装、寓高林寺。玉椿軒運食。午／后到品川。

。廿六日、雨。

朝起、洒掃室内、出市街購木綿单衣、托裁縫／於阿佐無。午后彭城子来。入夜表具屋来、托／掛軸大夫図・骨筆卷・山水帖・交接筆痕帖二／冊、一則帑本、一則統本之装演。

。廿七日、到乙咩、又銅座町取单衣帰。晚丸／十弟来。訪松浦、不在。行市街、吃蕎帰。（42丁才）

。廿八日、雨。

朝松浦来訪、到龍玉亭一酌。午后訪／岡田君。

。廿九日、晴。

微恙、終日臥枕。此日梅屋来、托画箋／聯落四枚。少七携来扇六本。松浦氏来酌。

。卅日、晴。

画事聯落式枚、八百宗之属。午時托支／那行翰。晚来訪松浦。廿九日卅日、諏訪／社賽、人甚盛、每年例祭夏祭也。（42丁ウ）

七月

。一日、霽。

訪松浦。終日画事。九十弟□蒼来。

。二日、霽、夜風甚。

彭城松浦来。晚訪芝香、夜十時帰棲。

。三日、風烈、天色黒。

梅屋主人来訪。午后少七来、相共到／公園一酌、暮帰。

。四日、風雨大烈、入夜雨尤甚。終日不出門。（43丁才）

。五日、風雨。

到草茂渡錢著煙管。又到乙咩豐水帰。

。六日、風雨。

朝起、喜多来。⁽¹⁾本肥前佐賀人。相共到興／福寺、終日弄筆。此日汪昌績簡来。

(1) 喜多 元々肥前佐賀の人とある。七月十日にもみえる。

。七日、午后陰天。

午后到田口氏、暮歸。又訪芝香契、遇／何培光士清而歸。

。八日、雨風。

堆珠堂・玉椿軒・朝日・芝香来。(43丁ウ)

。九日、雨風。

午后到芝香一酌、^与黑川遇。入夜相伴／歸寓、同臥。

。十日、雨風。

高木少七・喜多来、伊藤電信来。内海／布価七円三十錢来、托少七。宮小路翰来。／夜八百宗来。

。十一日、雨風不烈。

訪黑川、不在。到手嶋〈伊勢町／料理屋〉一酌、至／晚歸寓。(44丁才)

。十二日、雨風。

終日不出。此日平戸相神浦人川原田⁽¹⁾・榎屋来。

(1) 川原田 平戸相神浦の人とある。七月二十一日にもみえる。

。十三日、雨風。

黑川来、恵四方竹。

。十四日、到聖堂在中嶋、拜聖像。又到松浦、／把杯歸寓。黑川秀波来。

(頭書)「雨風」

。十五日、小晴。投上海郵便。到手嶋与晤竹会。

(頭書)「雨風」

。十六日、雨風。

午后到山川。相会者芝香・黑川也。到夜／歸。此日宮小路自諫早至、又雨邨来。

(44丁ウ)

。十七日、雨風。

雨邨来、相伴到公園。午后到後藤／町万屋、浩潮老人又来。終日歛晤相樂。夜十時歸寓。

。十八日、雨。

午后到玉川、与品川大倉一酌告別。相会／者芝香・玉椿軒也。入夜十二時歸寓。十九日。

竹下佳隆・中尾泰藏来。午后訪浩潮老人、／到岡部。此日鶴谷郵致子琴翰来。

(45丁才)／与浩潮老人、夜飲高木氏亦来。

。廿日、雨風。

到山川把杯、黑川・彭城同会。

。廿一日、雨。

終日不出。興福寺春多・三菱社長岡田・山川／黑川・浩潮・博多眞屋・平戸川(頭書)「大倉紙一枚／山水河原田／渡候、／絹地少枚／雪中／黑川渡候、」

原田諸君来。／入夜到三菱社長宅一酌、芝香来。

。廿二日、小晴。

岡田・黑川・山川。終日不出。八百慶来。／入夜少七・乙咩・高木来。(45丁ウ)

(頭書)「十餘枚／八百宗渡候、」

。廿三日、晴。

終日不出。入夜山川・黑川・八百宗・素／外来。

。廿四日、晴。

浩潮・鶴代^(龍力)・八百宗来。終日不出。

。廿五日、晴。

山川・芝香来。入夜伊三次・万屋・少七／・八百宗来。

。廿六日、晴。

高見・芝香来。(46丁才)

。廿七日、晴。

山川・浩潮老人来。

。廿八日、晴。

終日不出。遊至新地。鏡如婦。

。廿九日、晴。

克三郎⁽¹⁾来。午后到新地、買品物而帰。／入夜浩潮・高木・松浦来、与克三郎⁽¹⁾離／杯。松浦妻君携琴来。

(1) 克三郎 七月三十日にもみえる。

。卅日、晴。克三郎携荷帰、送到江戸町／嘉助屋。入夜山川・鎌田⁽¹⁾来。(46丁ウ)

(1) 鎌田 〆〆にしかみえない。

。卅一日、宮小路帰諫早、送到蜚茶屋。

(頭書)「晴」

(5行余白)

、蘿 霞少年不楽奈老何／景春風多尺幅山林那足道好将飛翮趁煙／白駒倏過情誰恋潘生潘生聽我歌一年美／如奔電花開花落年々見行樂從來貴及時(47丁才)／繫馬垂陰蹴相就醉留碧玉双明璫人世万事／繁音遶又不見胡姬玉腕欺飛霜五陵少年喜欲狂／王孫金勒嘶芳草翡翠樓中簫亂鳴揮鞭踏去／月滿湖此中佳趣君知無君不見洛陽(三／□) 月花開早／娛偶持一冊索我画々作春郊戲馬図楊柳青々／灑驚風雷更探名勝策雲駒名山巨麓足清／才目空千古心胸開漢隸秦碑不釈手臨池墨／塵一奔走窮途蹶足還株守清生磊落真奇／我過二十尚貧賤斗室低頭事筆研時向風

春郊戲馬図 葯甫呉鑲 (47丁ウ)

乙咩。

池原

簞所。内具石痴湘帆 石丈老師

坂元

鶴屋

福井 浦橋 大城谷

(替) 畹味／安豊 同絨 井上 伊東

高木 八百惣

彭城 高木。

(司馬／井上) 同絨内具伊藤・内海 龜谷 着報廿三日認 四月一日 (48丁才)

君兄在日本崎陽弟交情最深

弟来上海為初未知地理都乞誘引 記姓名并居処 後日看你同共

後 一点鐘

賜綿并金請券

在大宰碼頭^{地名}怡怡糖棧便是 (48丁ウ)

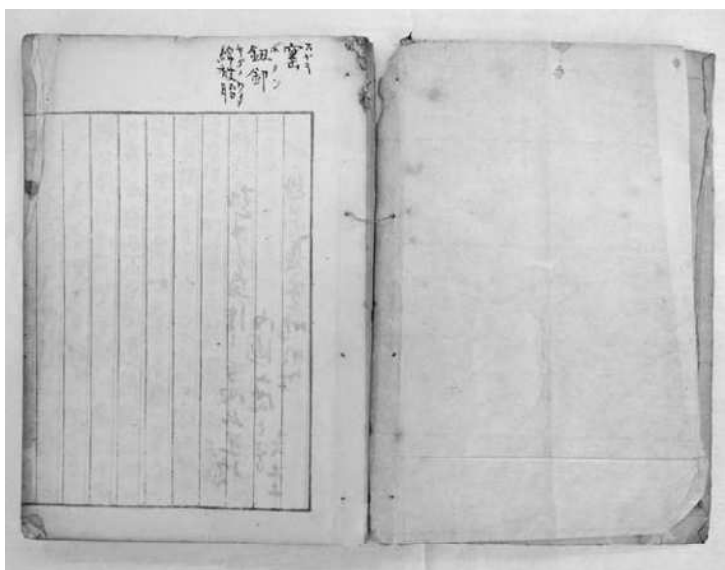
(裏表紙見返)「穩波無恙路三千、楊子江頭先繫船、粉壁／紅欄幾層影、被遮兩岸

柳梧煙」

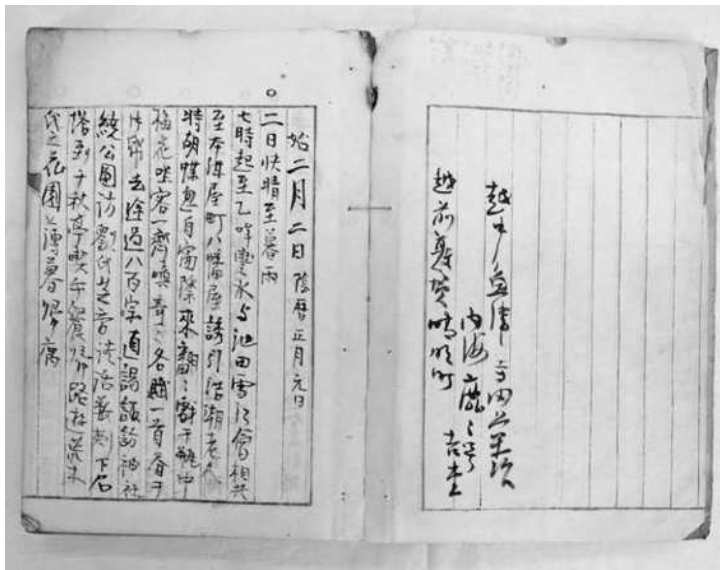
図 版



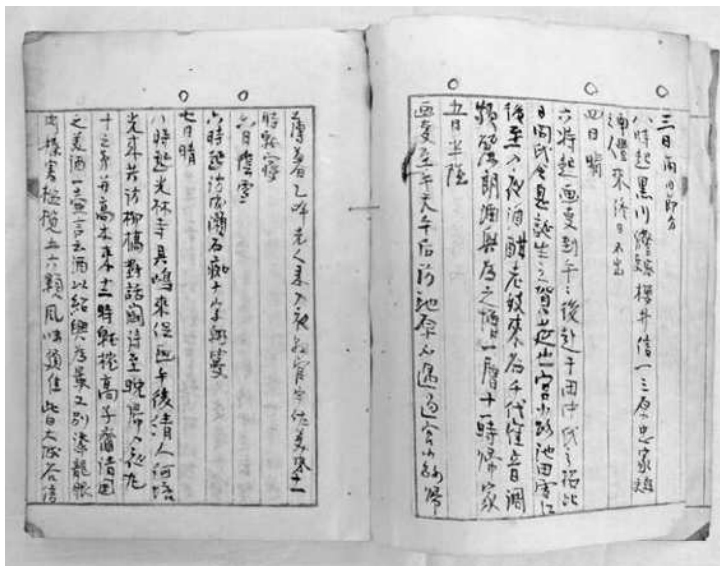
日間些事記 1. 表紙



日間些事記 2.
表紙見返 (右) — 第 1 丁表 (左)



日間些事記3.
第1丁裏(右) — 第2丁表(左)



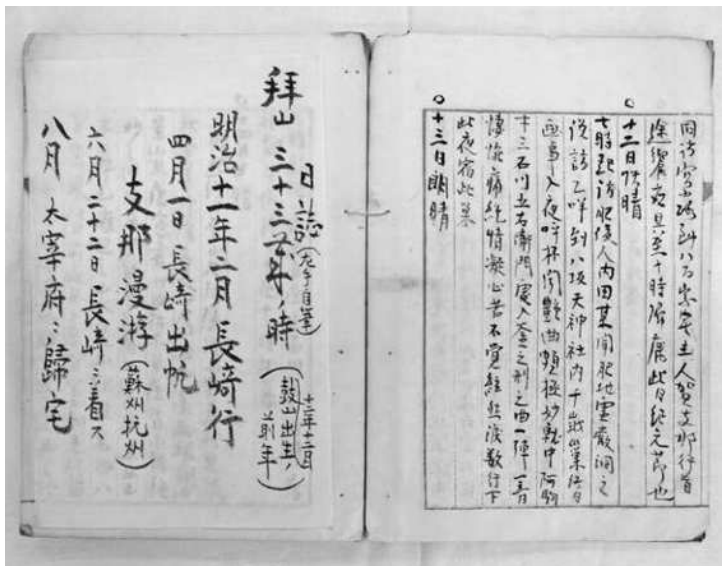
日間些事記4.
第2丁裏(右) — 第3丁表(左)



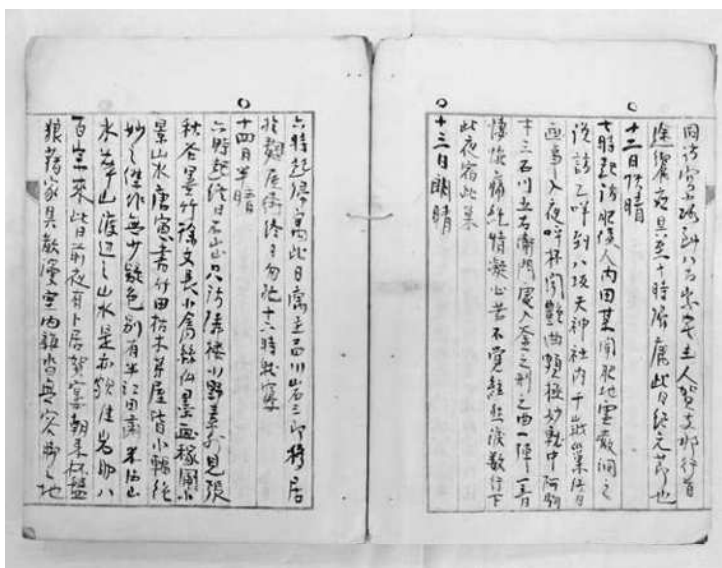
日間些事記5.
第3丁裏(右) — 第4丁表(左)



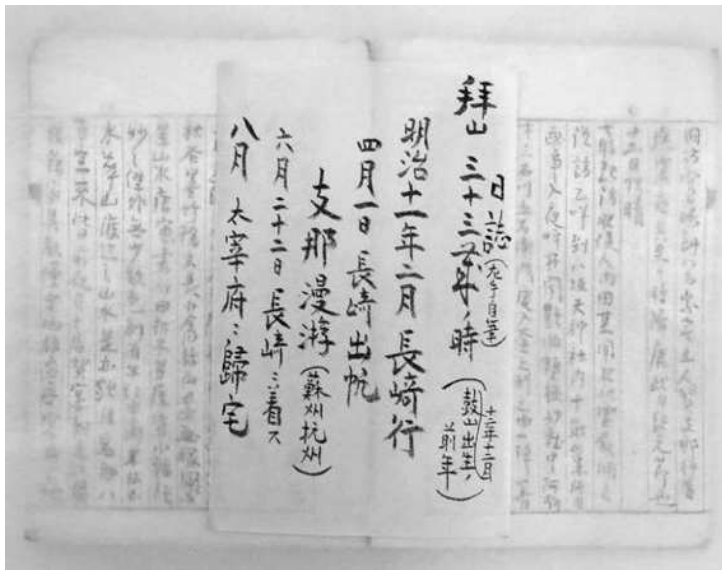
日間些事記6.
第4丁裏(右)―第5丁表(左)



日間些事記7.
第5丁裏(右)―別紙(第6丁表との間に挿入)(左)



日間些事記8.
第5丁裏(右)―第6丁表(左)



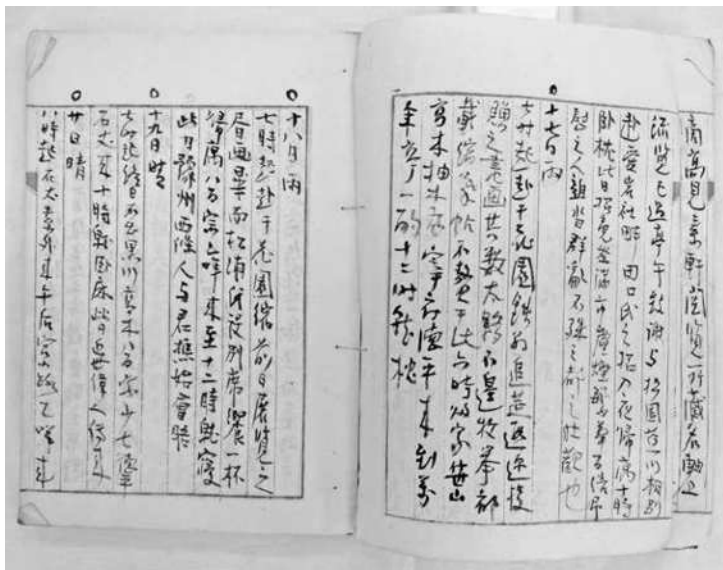
日間些事記9. 別紙



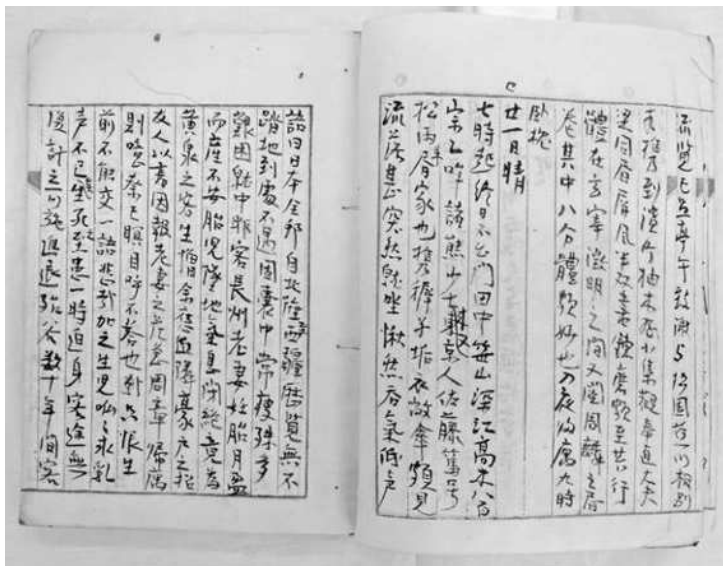
日間些事記10.
第6丁裏(右)―第7丁表(左)



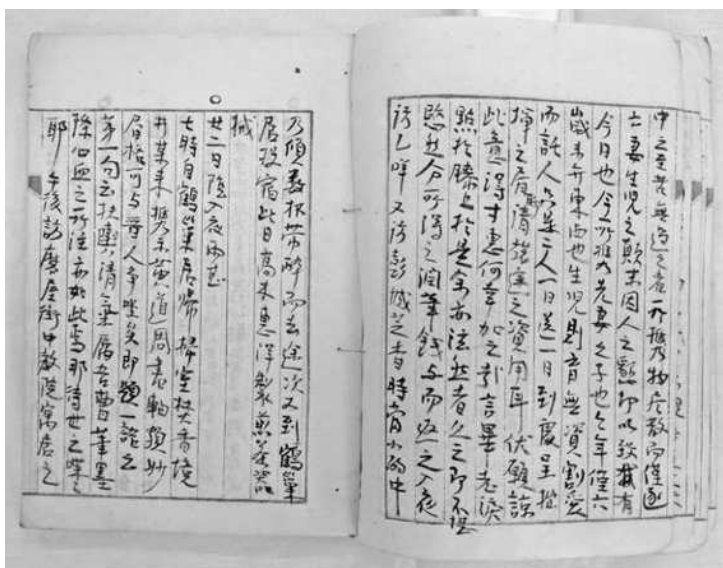
日間些事記11.
第7丁裏(右)―第8丁表(左)



日間些事記12.
第8丁裏(右) — 第9丁表(左)



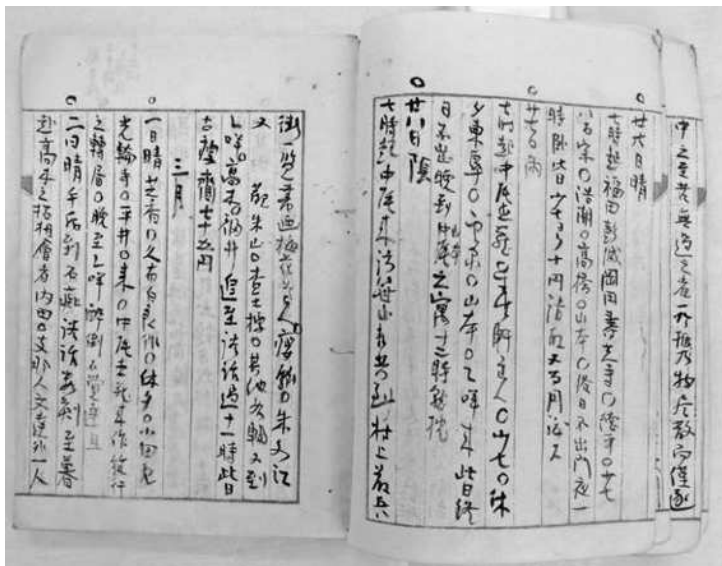
日間些事記13.
第9丁裏(右) — 第10丁表(左)



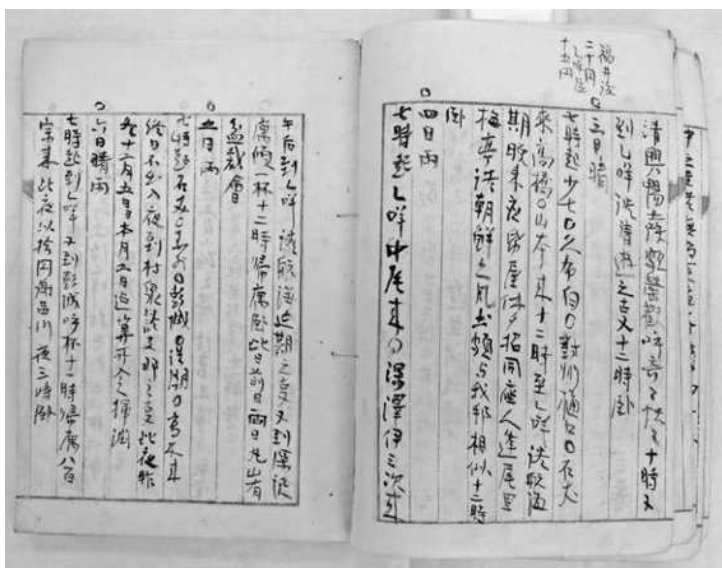
日間些事記14.
第10丁裏(右) — 第11丁表(左)



日間些事記15.
第11丁裏 (右) 一第12丁表 (左)



日間些事記16.
第12丁裏 (右) 一第13丁表 (左)



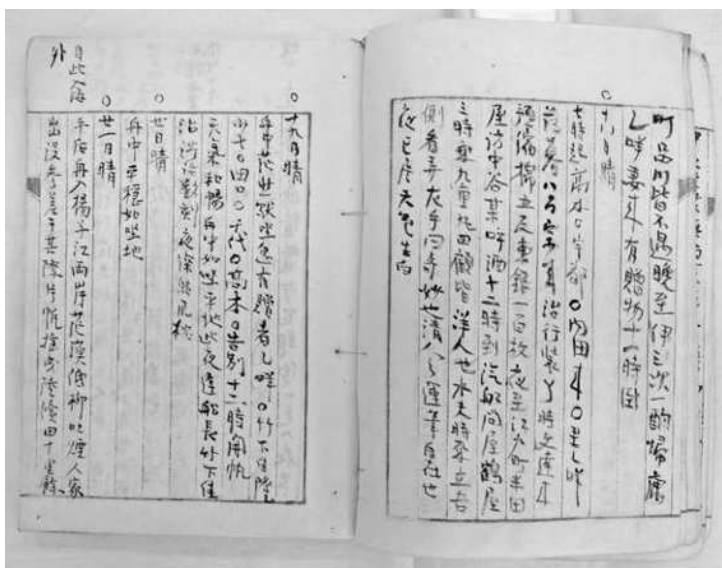
日間些事記17.
第13丁裏 (右) 一第14丁表 (左)



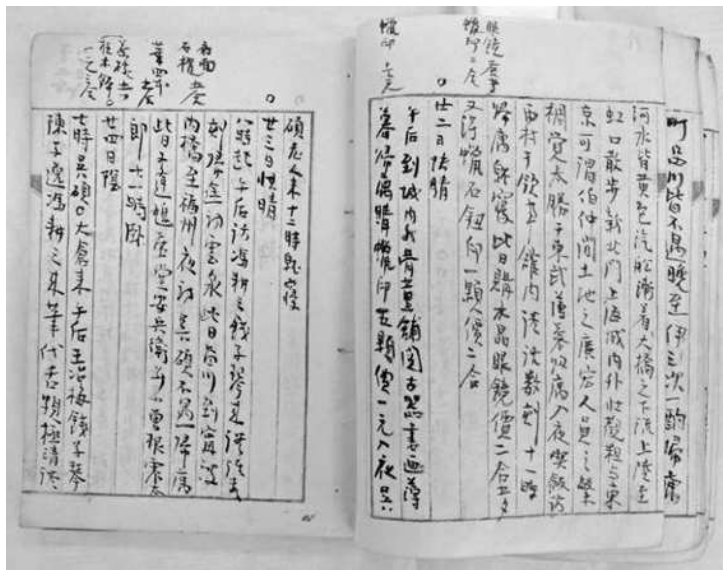
日間些事記18.
第14丁裏(右) 一第15丁表(左)



日間些事記19.
第15丁裏(右) 一第16丁表(左)



日間些事記20.
第16丁裏(右) 一第17丁表(左)



日間些事記21.
第17丁裏（右）—第18丁表（左）



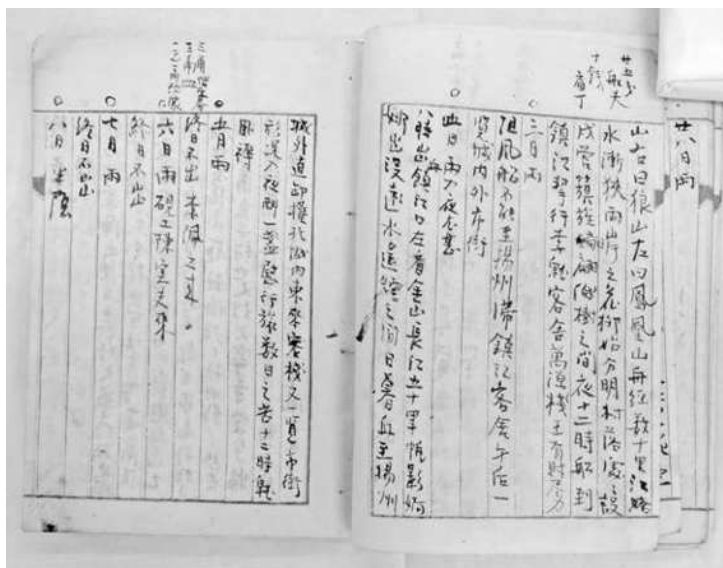
日間些事記22.
第18丁裏（右）—第19丁表（左）



日間些事記23.
第19丁裏（右）—第20丁表（左）



日間些事記24.
第20丁裏(右) 一第21丁表(左)



日間些事記25.
第21丁裏(右) 一第22丁表(左)



日間些事記26.
第22丁裏(右) 一第23丁表(左)



日間些事記27.
第23丁裏（右）—第24丁表（左）



日間些事記28.
第24丁裏（右）—第25丁表（左）



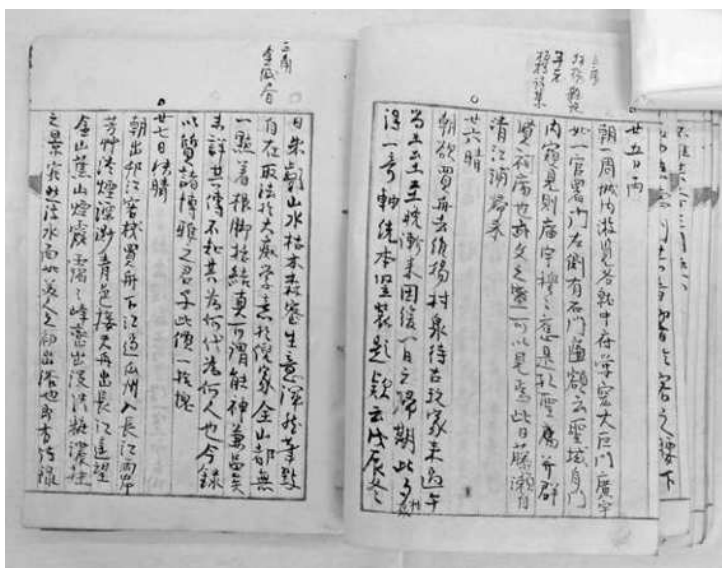
日間些事記29.
第25丁裏（右）—第26丁表（左）



日間些事記30.
第26丁裏(右) 一第27丁表(左)



日間些事記31.
第27丁裏(右) 一第28丁表(左)



日間些事記32.
第28丁裏(右) 一第29丁表(左)



日間些事記33.
第29丁裏（右）—第30丁表（左）



日間些事記34.
第30丁裏（右）—第31丁表（左）



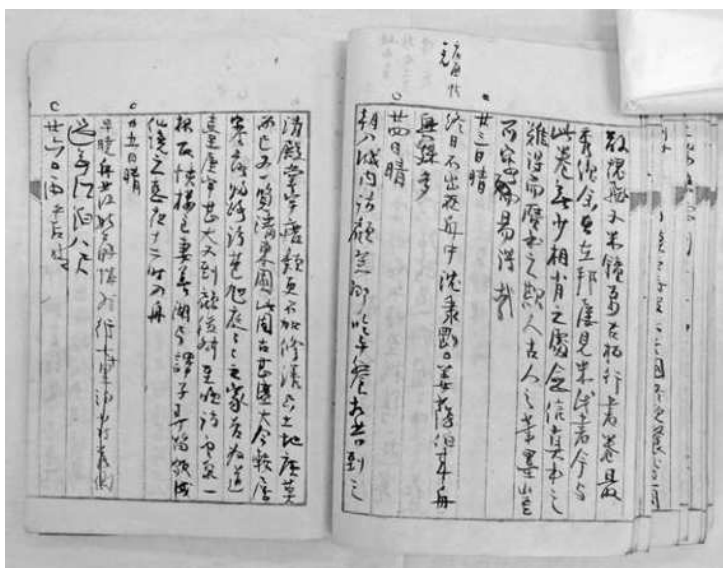
日間些事記35.
第31丁裏（右）—第32丁表（左）



日間些事記36.
第32丁裏（右）一第33丁表（左）



日間些事記37.
第33丁裏（右）一第34丁表（左）



日間些事記38.
第34丁裏（右）一第35丁表（左）



日間些事記39.
第35丁裏 (右) 一第36丁表 (左)



日間些事記40.
第36丁裏 (右) 一第37丁表 (左)

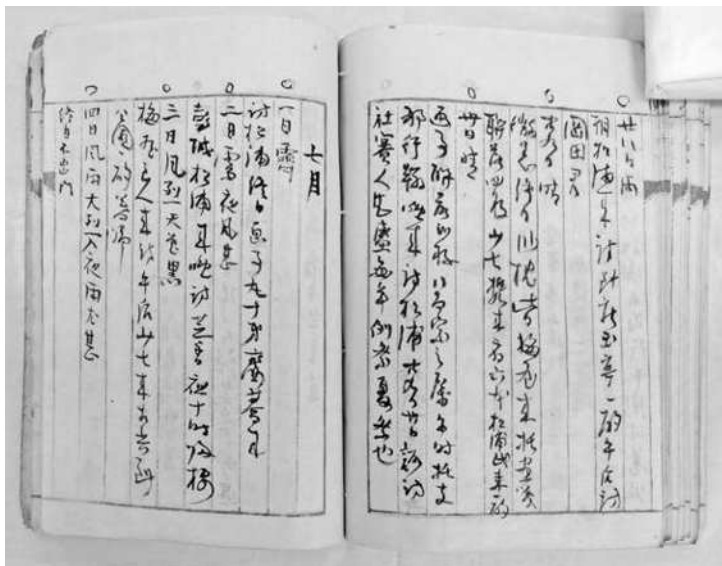


日間些事記41.
第37丁裏 (右) 一第38丁表 (左)

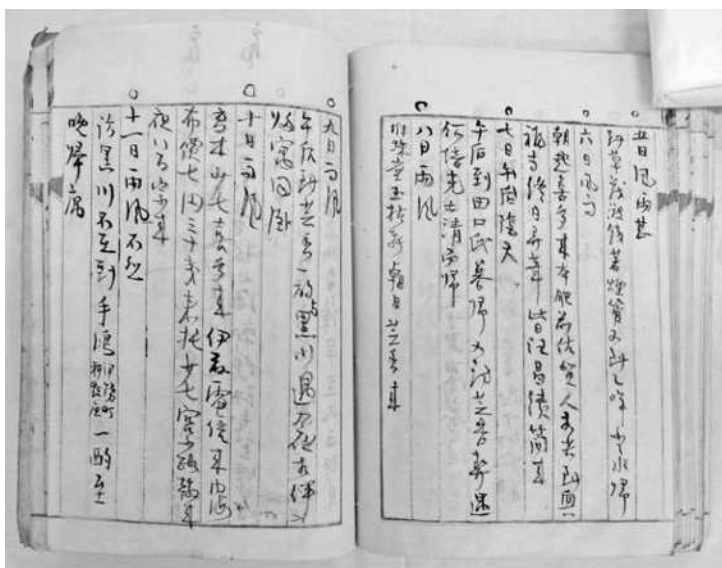
日間些事記42.
第38丁裏（右）—第39丁表（左）日間些事記43.
第39丁裏（右）—第40丁表（左）日間些事記44.
第40丁裏（右）—第41丁表（左）



日間些事記45.
第41丁裏（右）—第42丁表（左）



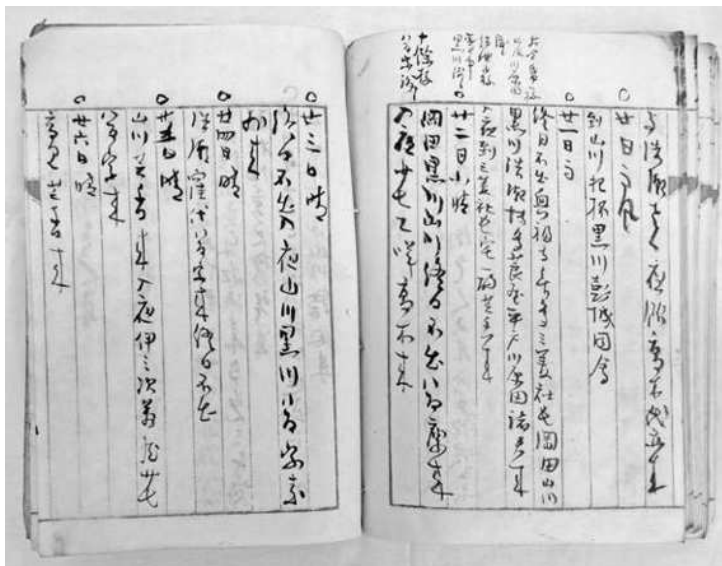
日間些事記46.
第42丁裏（右）—第43丁表（左）



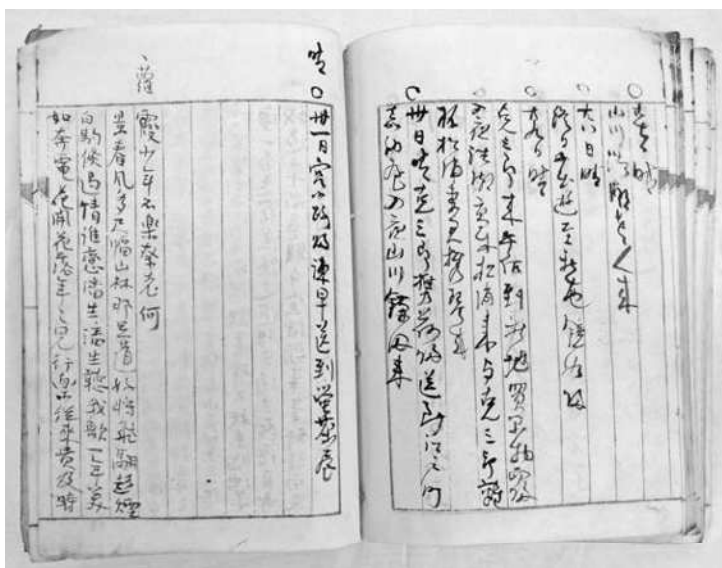
日間些事記47.
第43丁裏（右）—第44丁表（左）



日間些事記48.
第44丁裏(右) 一第45丁表(左)



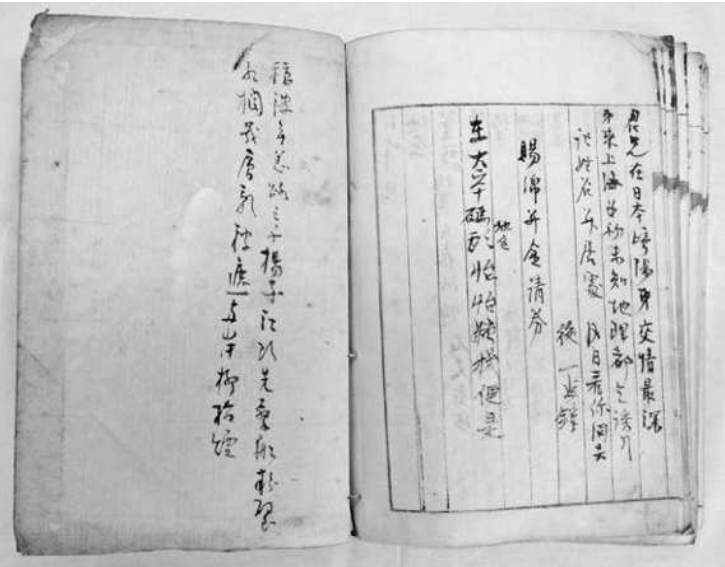
日間些事記49.
第45丁裏(右) 一第46丁表(左)



日間些事記50.
第46丁裏(右) 一第47丁表(左)



日間些事記51.
第47丁裏（右）—第48丁表（左）



日間些事記52.
第48丁裏（右）—裏表紙見返（左）



日間些事記53. 裏表紙